

FIVA

リカバリーマニュアル

(品番 :MPC-225BS/225BL)



お買い上げいただき、まことに有難うございました。
本書はMPC-225BS/225BLのリカバリー方法について、簡単に正しく理解できるように書かれております。

- 目次 -

第1章 Bモードリカバリ編

- 1.はじめに 3
- 2.本体と外部サーバー間リカバリーのための前準備 5
- 3.単サーバーと単クライアント間のリカバリー 7
- 4.単サーバーと複数クライアント間のリカバリー 9
- 5.サーバーとクライアント間リカバリーイメージについて 10
- 6 . Bモードリカバリ [ハードディスクブート版] 12
 - 6-1 .メニューの“1”を選択 『WINDOWS2000 領域のバックアップ』 () 13
 - 6-2 .メニューの“2”を選択 『WINDOWS2000 領域の復元』 () 15
- 7 . Bモードリカバリ [PCカードブート版] 27
 - 7-1 .メニューの“1”を選択 『ハードディスク全体のバックアップ (サーバーへ)』 () 28
 - 7-2 .メニューの“2”を選択 『ハードディスク全体の復元 (サーバーから)』 () 29
 - 7-3 .メニューの“4”を選択 『拡張メニュー』 30
- 8.補足
 - 8-1 .PCカードブート版リカバリーのPCカード作成 44
 - 8-2 .ブータブルのリカバリー CDROM 作成方法 46

第2章 リカバリCD - ROM編

- 1.はじめに 53
- 2.リカバリCD-ROMの機能概要 53
 - 2-1. 『ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール』について 53
 - 2-2. 『保守領域へのリカバリプログラムのインストール』について 53
- 3.デバイス類の準備 54
- 4.リカバリCD-ROMの操作説明 54
 - 4-1 デバイス類のセット 54
 - 4-2 BIOS の設定 55
 - 4-3 ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール 56
 - 4-4 保守領域へのリカバリプログラムのインストール 58
- 5.WINDOWS2000 をインストールする 59

第3章 Windows2000インストール編	60
1.はじめに	61
2.セットアップまでの手順	61
3.HDの準備	61
4.デバイス類の準備	62
5.起動FDの作成	62
6.セットアップデータの準備	65
7.セットアップの実行	66
8.ドライバおよびアドオンソフトについて	66
8-1 ドライバのセットアップ	66
8-2 アドオンソフトのセットアップ	68

第1章

Bモードリカバリー編



1.はじめに

Bモードリカバリーについて

本体のソフトスイッチを操作して、起動方法を変えることにより、その片方でリカバリーシステムを起動することができます。このリカバリーシステムを、**Bモードリカバリー**と呼びます。

Bモードリカバリーには、**ハードディスクブート版**と**PCカードブート版**があります。

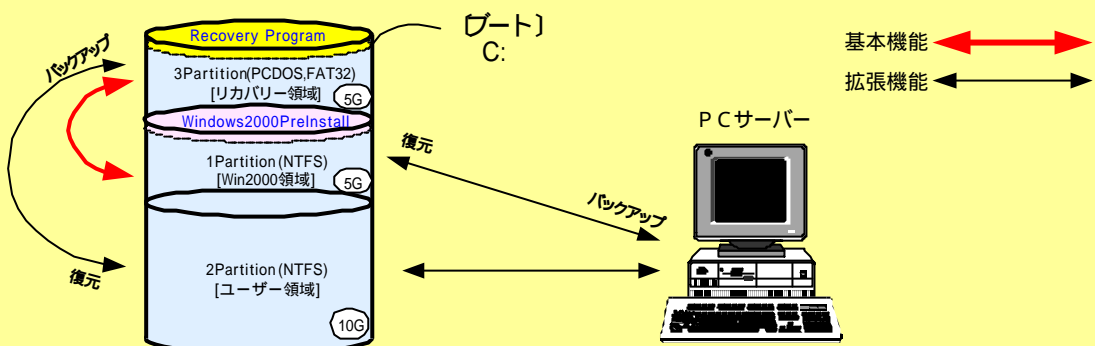
前者の基本機能は、**Windows2000領域（Cドライブ）のバックアップ（ ）と、復元（ ）**です。

後者の基本機能は、**ハードディスクまるごとバックアップ（ ）と復元（ ）**です。これを行うには、PCカードに専用のアプリケーションを入れておく必要があります。

双方とも、拡張機能として、上記以外の数種類のリカバリーを行えます。

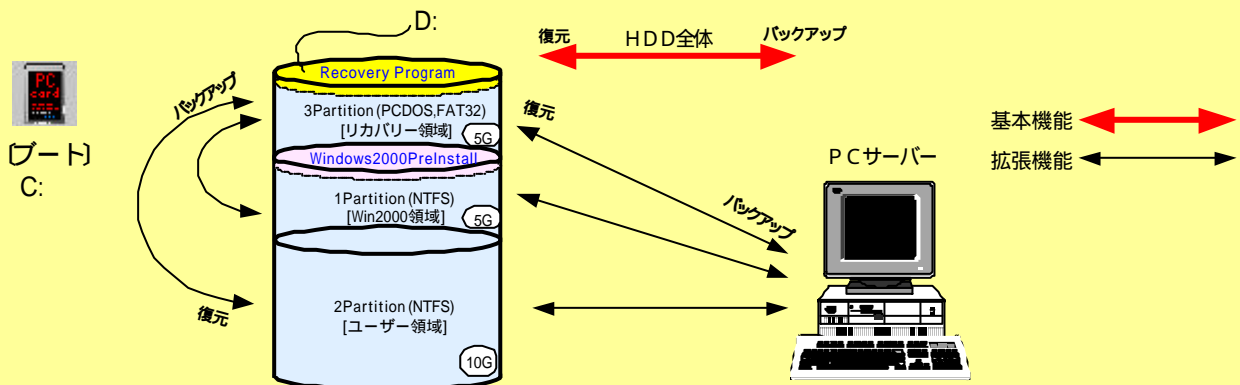
別頁において、下図の ~ の説明をしていきます。

ハードディスクブート版で行えるリカバリー



- ： Windows2000 領域（Cドライブ）を本体リカバリー領域（Eドライブ）へのバックアップ及び復元。
- ： ユーザー領域（Dドライブ）を本体リカバリー領域（Eドライブ）へのバックアップ及び復元。
- 但しリカバリー領域の許す限り。
- ： Windows2000 領域（Cドライブ）を外部 PC へのバックアップ及び復元。
- ： ユーザー領域（Dドライブ）を外部 PC へのバックアップ及び復元。

PCカードブート版で行えるリカバリー



- ： Windows2000 領域（Cドライブ）を本体リカバリー領域（Eドライブ）へのバックアップ及び復元。
- ： ユーザー領域（Dドライブ）を本体リカバリー領域（Eドライブ）へのバックアップ及び復元。
- 但しリカバリー領域の許す限り。
- ： Windows2000 領域（Cドライブ）を外部 PC へのバックアップ及び復元。
- ： ユーザー領域（Dドライブ）を外部 PC へのバックアップ及び復元。
- ： ハードディスク全体を外部 PC へのバックアップ及び復元。
- ： リカバリー領域を外部 PC へのバックアップ及び復元。

<注意！>

外部PCへバックアップ及び復元させる為には、Symantec Ghost マルチキャストサーバーが必要になります。この機能を利用する為には、別途ご購入していただく必要があります。

Symantec Ghost マルチキャストサーバーとは、SYMANTEC 社の Symantec Ghost Ver.6.5 に含まれるユーティリティです。
 < Symantec Ghost Ver.6.5 に関しての情報はこちら >
<http://www.symantec.co.jp/>

MPC-225に搭載しているSymantec Ghost 6.5は、スタンドアローン（単体）で動作する権利です。（スタンドアローンユーティリティ扱い）マルチキャストサーバを使用する場合、ライセンスを取得しなければなりません。そのライセンスは、クライアント数で決まります。また、これはライセンスだけの購入ですので、CD-ROMが1つ必要になります。これは、別途購入が必要です。またこのソフトに、マルチキャストサーバとクライアントソフトが入っています。クライアントソフトは、MPC-225に搭載の物と同一のものです。

またこの見積もりは、Webから可能となっております。

必要なシステム等の情報は、

<http://www.symantec.com/region/jp/products/ghost65/system.html#price>

Japan

- グローバルサイト
- 製品情報
- オンラインショップ
- サービス&サポート
- セキュリティレスポンス
- ダウンロード
- シマンテックについて
- サーチ
- フィードバック

1995-2001 symantec corporation.
all rights reserved.
[詳細について](#)
[プライバシーポリシー](#)

Symantec Ghost VAR(リセラー)向けの価格は、
カスタマーサービスセンターにお問い合わせください。

見積バージョン	Created: Oct 16 2001 4:25 PM		
見積有効期限	N/A		
顧客名	N/A		
履歴ナンバー	N/A		
販売代理店	88116		

製品ナンバー	製品説明	削除	予想小売	数量	合計
SYMANTEC					
Norton AntiVirus製品の追加購入時は リニューライセンス、アップグレード保険、ライセンスメディアパックを必ず同時にご購入ください。 25ライセンスから購入可能です。追加購入は10ライセンスからとなります。					
SV07-91-02917-JP	Symantec Ghost 6.5 Win95/98 Win NT ライセンス - リニューライセンス	X	¥1,760 25-99	25	¥44,000
SYMANTEC-ライセンスメディアパック					
07-00-02917-IN	Norton Ghost (英語版) 6.5 Windows95/98/Me/NT/2000/Linux ライセンスメディアパック - 使用許諾なし	X	¥3,000 None	1	¥3,000
*小計					¥47,000
*消費税、送料は含まれていません。 見積合計を再確認するには、 見積確認/印刷ボタンをクリック。					

再計算/保存
新たな見積りを作成
製品を追加
見積確認/印刷
特別価格を確認

ボタンの動作に関してよくわからない場合は [購入方法について](#) を参照下さい。

分割バックアップファイル（スパン）

本体（FIVA）内で閉じたバックアップ作業は、2Gバイトごとに自動で分割された、単独または複数のファイルとして作成されます。（2Gバイトスパン）
2Gバイトを超えなければ、1つのバックアップファイルが生成されません。

本体（FIVA）からサーバーへのバックアップ作業は、600Mバイトごとに自動で分割された、単独または複数のファイルとして作成されます。（600Mバイトスパン）
サーバー側には十分な容量のHDDを準備してください。

NTFSフォーマット領域の復元

Windows2000領域とユーザー領域は、NTFSフォーマットであり、この領域の復元処理を行った場合、Windows2000再起動時、NTFSボリュームチェック操作が実行されます。これを通して、OSが起動してはじめて復元が完了します。

本体（FIVA）内での閉じたバックアップにおける制約（重要）

Windows2000領域またはユーザー領域を、リカバリー領域へバックアップする時、まずエリアの使用領域（%）を確認してください。それが約80%を超えている場合は、バックアップは行わないでください。約80%を超えた領域をバックアップすることはできませんが、後にこれを復元することができなくなる可能性があります。
これは、GHOST（リカバリーツール）がバックアップまたは復元において、転送先に十分な容量を要求してくるから起こることです。

製品購入後のリカバリー作業（必須）

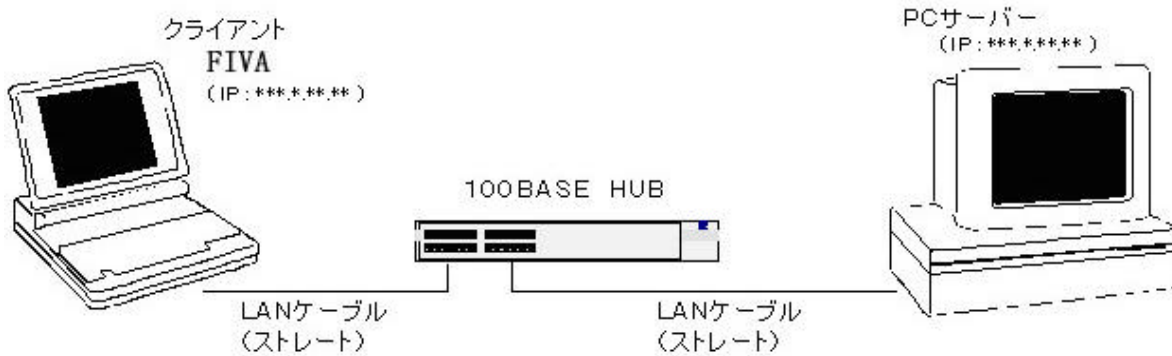
製品購入後、順序として、Windows2000のセットアップを実行し、それが完了したら、Windows2000領域のバックアップを行ってください。（第1章ハードディスクブート版の、Windows2000領域のバックアップ（ ）を参照）

バックアップデータのブータブルリカバリーCDROM化について

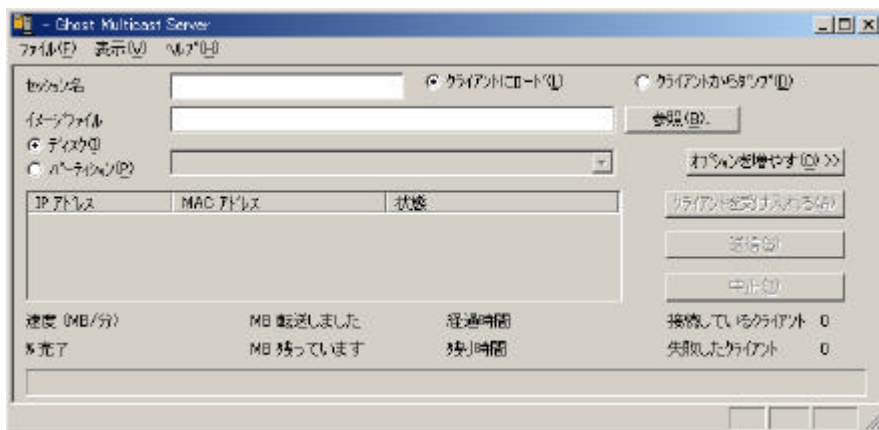
バックアップデータをCDROMに保存し、CDROMからリカバリーする事が可能です。詳細については、「第1章補足」の「ブータブルCDROMの作成方法（46ページ）」を参照して下さい。

2. 本体と外部サーバー間リカバリーのための前準備

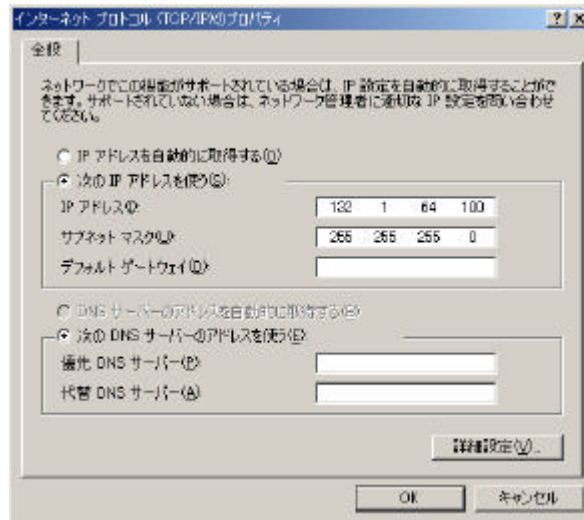
予め、Symantec Ghost マルチキャストサーバーの環境を準備する必要があります。本体とPCサーバー間で、下図のようにLANを構築します。各IPアドレスは、双方が異なる任意の値です。



外部PCサーバーに、Symantec Ghost マルチキャストサーバーをインストールします。下図は、マルチキャストサーバー起動画面です。



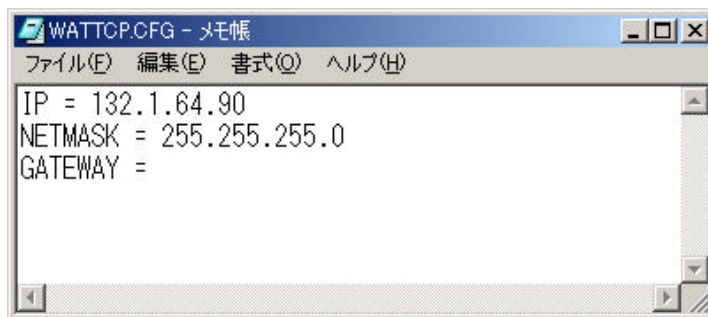
次に、**外部PCサーバー側**の、IPアドレスとサブネットマスクを設定します。値は任意ですが、他サーバー、他クライアントと値が重複しないように注意してください。下の設定は例です。



次に、**クライアント側**の、IPアドレスとサブネットマスクを設定します。ファイル (WATTCP.CFG) をテキスト編集します。値は任意ですが、他サーバー、他クライアントと値が重複しないように注意してください。下の設定は例です。

WATTCP.CFG は隠しファイルとなっております。予め隠しファイルを表示させておく必要があります。

ファイル (**WATTCP.CFG**) のパス : E:\¥GHOST¥WATTCP.CFG



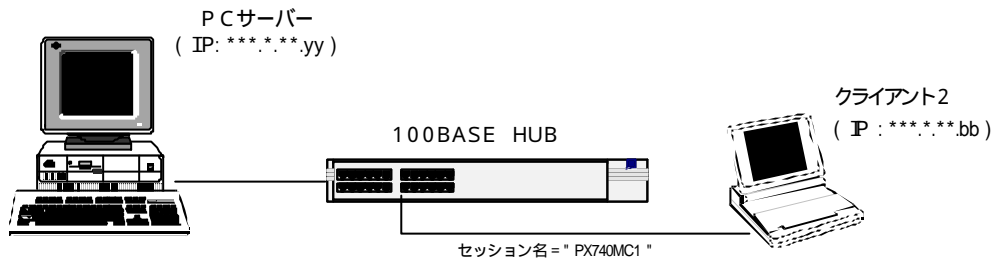
これでLANの構築は完了です。

3. 単サーバーと単クライアント間のリカバリー

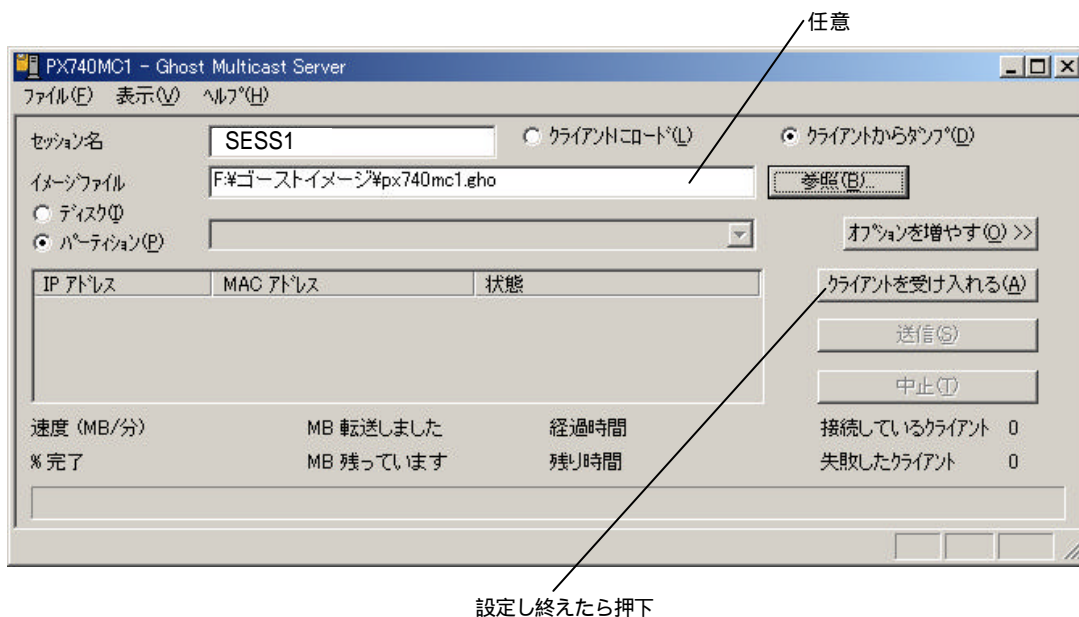
サーバー間とのリカバリーのやり取りは、同セッション名どうして行われます。クライアント（FIVA）の各パーティションに割り当てられているセッション名は次のとおりです。

- ・ S E S S 1 Windows2000 領域のリカバリー
- ・ S E S S 2 ユーザー領域のリカバリー
- ・ S E S S 3 リカバリー領域のリカバリー
- ・ S E S S 1 2 3 ハードディスク全体のリカバリー

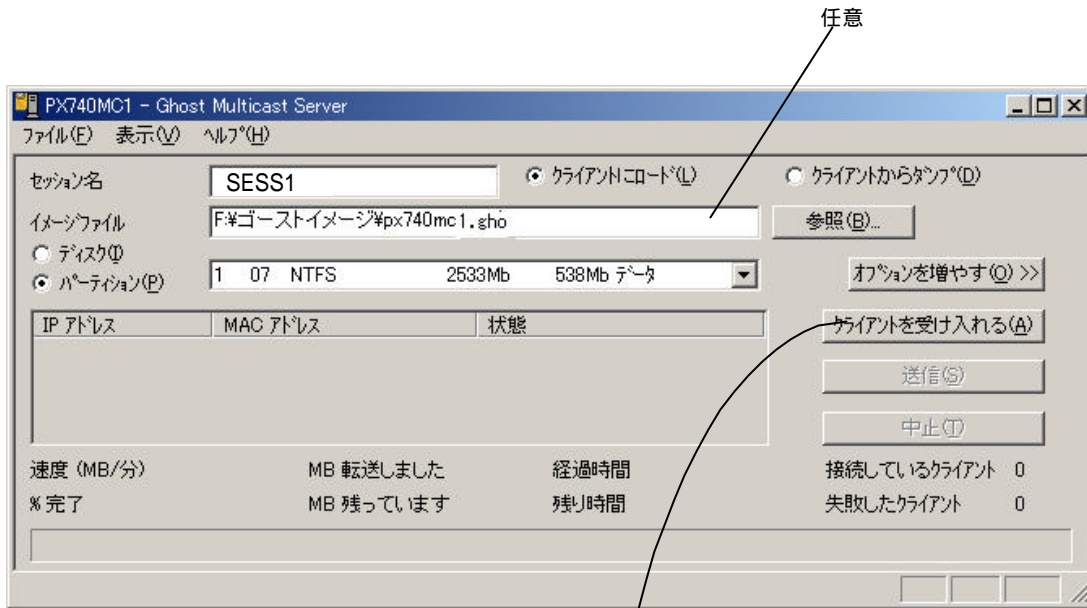
サーバーとクライアントは、各々、異なる特定のIPアドレスを設定します。IP値は任意です。



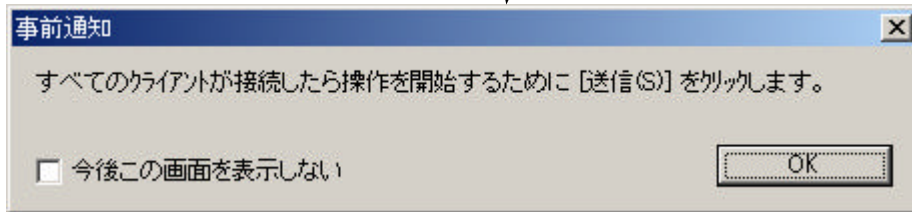
以下の例は、Windows2000 領域**バックアップ時**の、マルチキャストサーバー設定です。イメージファイルの欄は、サーバー側にバックアップするファイル名を指定します。



以下の例は、Windows2000 領域復元時の、マルチキャストサーバー設定です。
 イメージファイルの欄は、サーバー側に保存されているファイルを指定します。

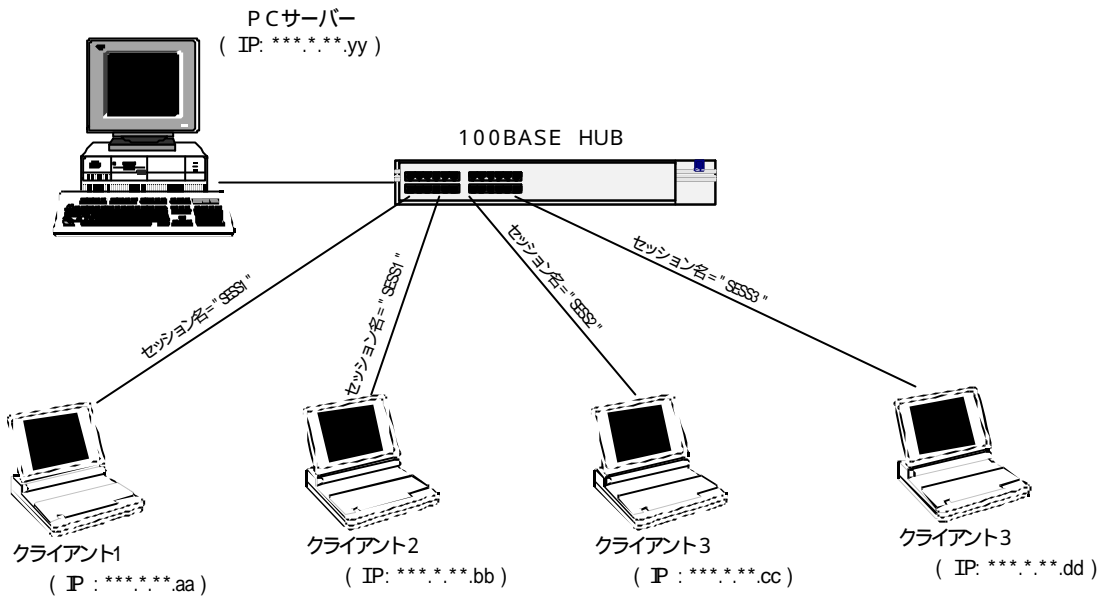


押下すると下の画面を表示し、OKで、スタンバイになる

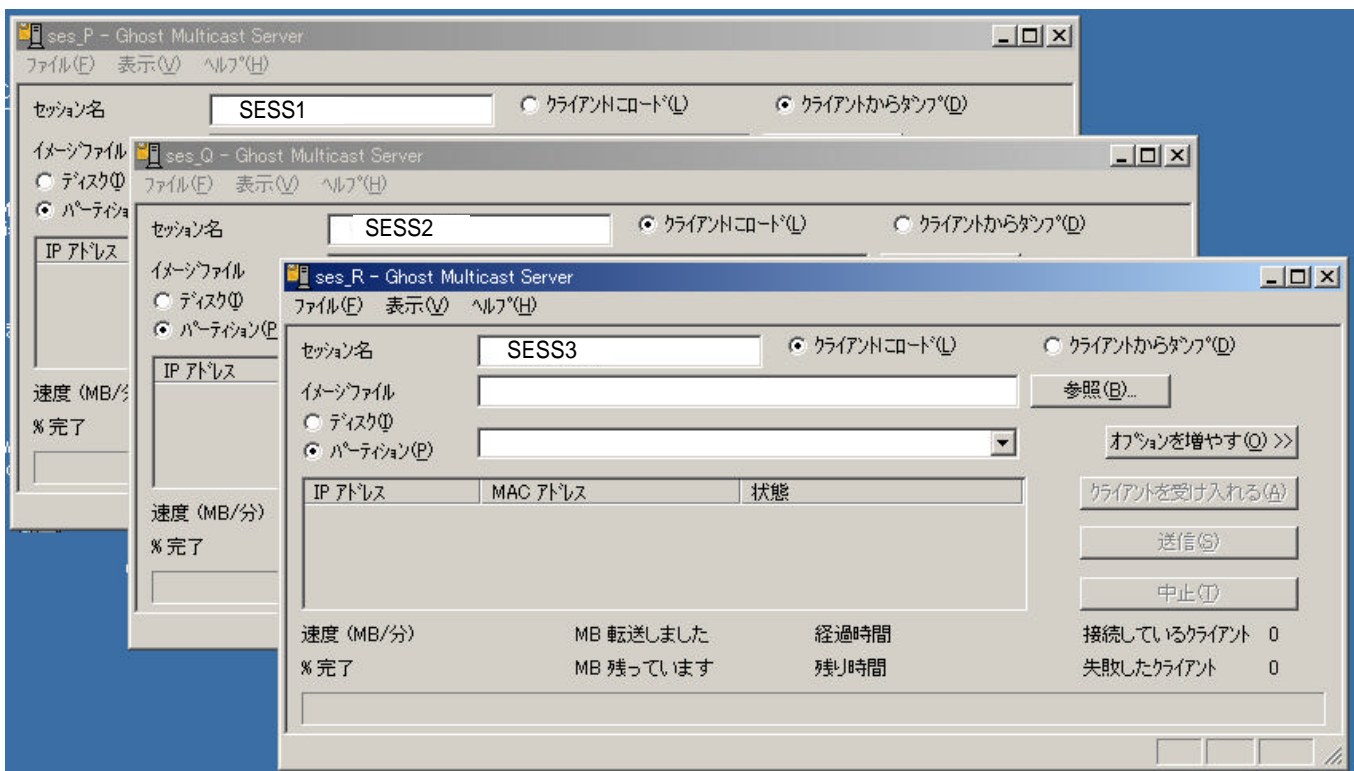


4.単サーバーと複数クライアント間のリカバリー

単サーバーと複数クライアント間で、異なるリカバリーを同時に行うこともできます。各々のセッション名を設定することにより、異なるリカバリーを識別できます。サーバーとクライアントは、各々、異なる特定のIPアドレスを設定します。IP値は任意です。

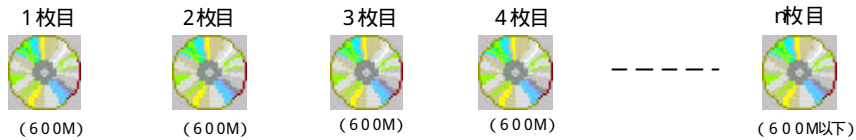


PCサーバー側のマルチキャストサーバー画面にて、各々、セッション名を設定します。セッション名が、"SESS1"のウィンドウは、クライアント1及びクライアント2とリカバリーを行うことができ、"SESS2"のウィンドウは、クライアント3と、"SESS3"のウィンドウは、クライアント4と行うことができます。



5. サーバーとクライアント間リカバリーイメージについて

本体（クライアント）からサーバーへ、領域またはディスクのバックアップを行う時、イメージファイルが600Mバイトを超える場合、ファイルが複数に分割して作成されます。これらは数珠繋ぎに連結された属性をもっています（スパンイメージ）。



600Mバイトごとのスパン作成は、イメージファイルを**ブータブルCDROM化**することを想定しています。詳細は、第1章補足の**ブータブルのリカバリーCDROM作成方法（46ページ）**を参照。

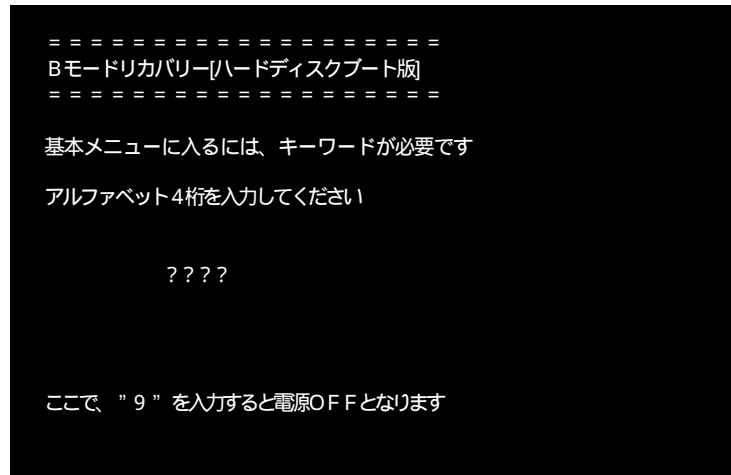
Bモードリカバリ

[ハードディスクブート版]

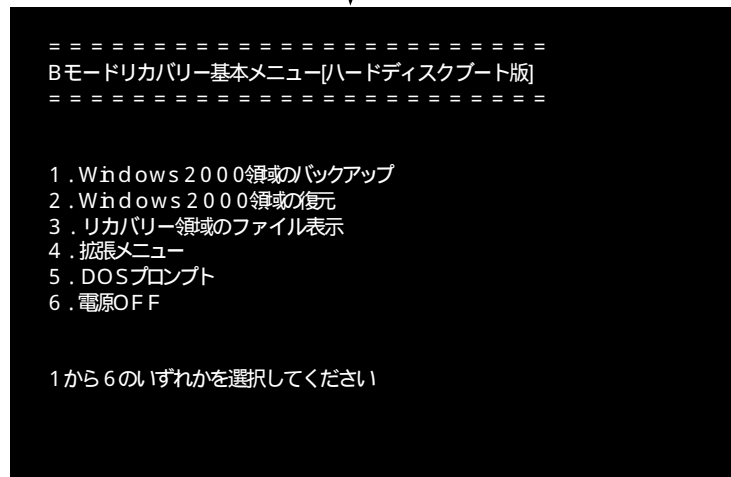
6 . Bモードリカバリー[ハードディスクブート版]

本体のスイッチをBモード側に倒した後電源投入すると、Bモードリカバリー[ハードディスクブート版]が起動します。Windows2000領域(Cドライブ)のリカバリー(バックアップまたは復元)が可能です。拡張機能では、その他数種類のリカバリーが可能です。

電源投入後は、リカバリーメニューがロックされているので、これを解除する必要があります。特定のキーワードを入力することにより、ロックが解除され、リカバリーメニューに入ることができます。



↓ キーワードが一致するとメニューに入る

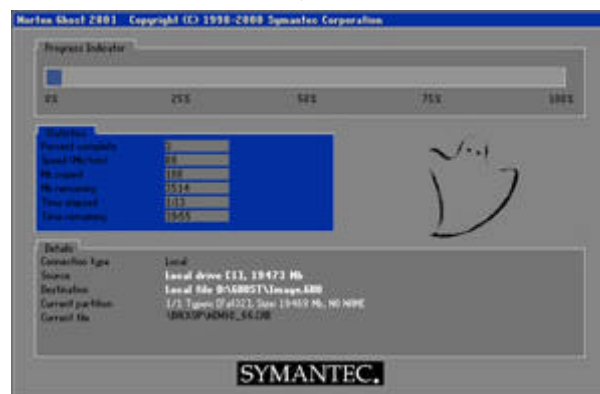
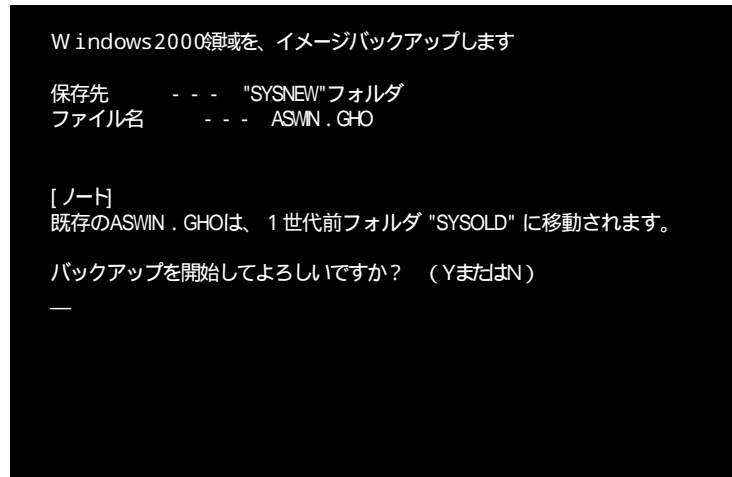


キーワード：FIVA
このキーワードは変更できません。

以降、Bモードリカバリー基本メニューの、1. 2. 4. を説明します。

6-1 .メニューの“1”を選択 『Windows2000 領域のバックアップ』 ()

ハードディスク内の別パーティション（リカバリー領域）に、Windows2000 領域の圧縮されたイメージファイルが保存されます。



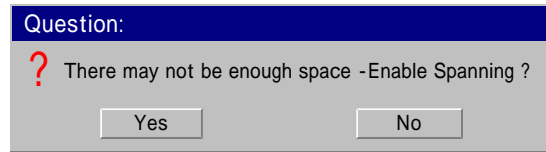
Windows2000 領域バックアップファイルを、少なくとも1つ作成することができます。リカバリー領域の容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを作成できます。バックアップが実行されるたびに、既存の Windows2000 領域バックアップファイルは古い順に消去されていきます。

バックアップファイルが2 Gバイトを超えると、自動的に次のスパンを作成します。2 Gバイトごとにファイルが分割されて作成されます。

注意) リカバリー領域の空容量が、ある領域をバックアップするに足りる容量であると思われる場合でも、空容量不足エラーを起こすことがあります。

例) Windows2000 領域のバックアップを行い、空のリカバリー領域内に、2.4 Gバイトのバックアップファイルが生成されました。リカバリー領域の残容量が約2.6 Gバイト(5 G - 2.4 G)のところに、続けて同領域をバックアップしようとしても、バックアップが実行されない可能性があります。

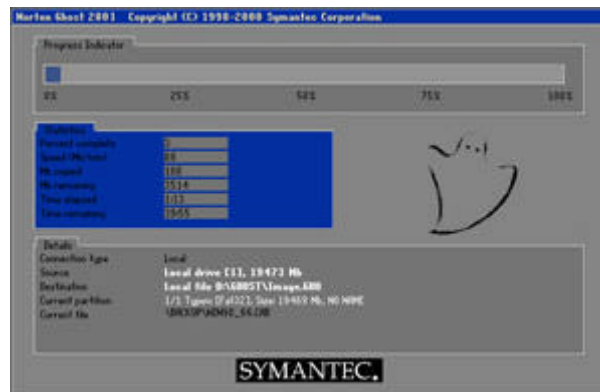
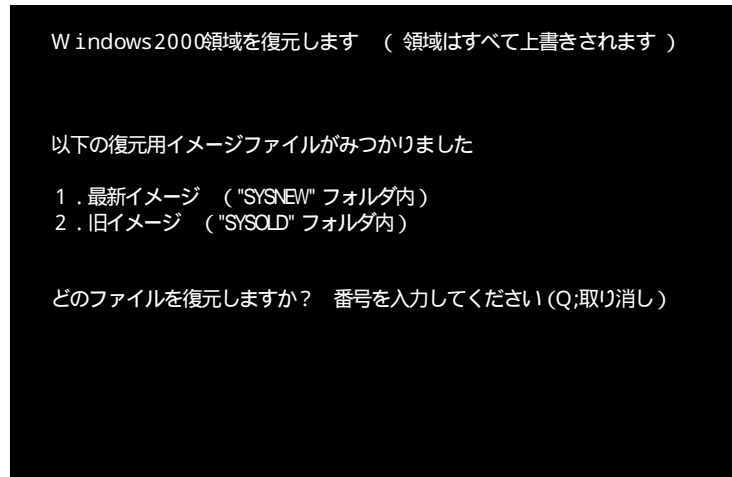
空容量不足の表示は次の通りです。表示の意味は、空領域が足りないが、スパンを有効にして他エリアの容量も共有することにより、バックアップを実行していいかどうかを聞いてきます。



開始直後に、上図のメッセージが現れたら、**”NO”を選択し、直ちにバックアップを中断してください。**
バックアップを可能にするには、リカバリー領域に存在するバックアップデータを他の場所に移動する必要があります。

6-2 .メニューの“2”を選択 『Windows2000 領域の復元』 ()

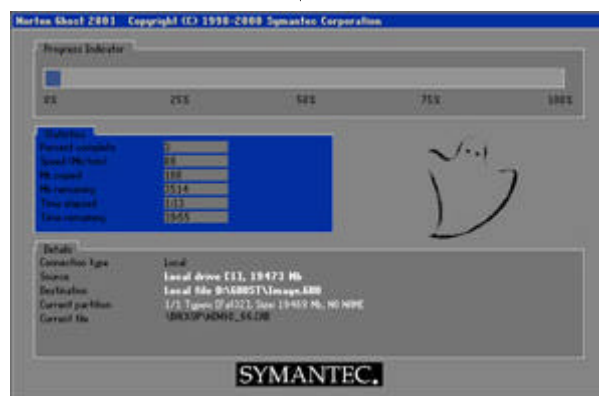
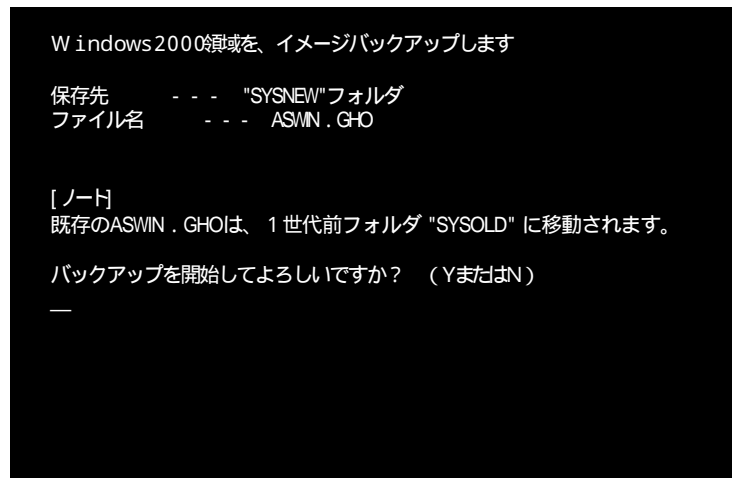
ハードディスク内の別パーティション（リカバリー領域）に保存してある、Windows2000 領域バックアップファイルを、Windows2000 領域に復元します。**領域はすべて上書きされます。**



リカバリー領域には、Windows2000 領域バックアップファイルが少なくとも1つ保存することができ、容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを保存できます。第2世代ファイルが存在する時の復元は、どちらかを選択することができます。

マトリックスの“A”を選択

『Windows2000 領域を、リカバリー領域内へファイル保存』()



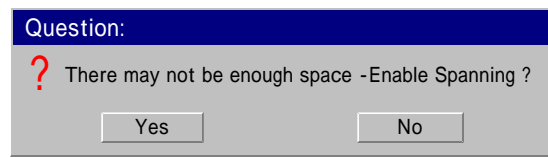
Windows2000 領域バックアップファイルを、少なくとも1つ作成することができます。リカバリー領域の容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを作成できます。バックアップが実行されるたびに、既存の Windows2000 領域バックアップファイルは古い順に消去されていきます。

バックアップファイルが2 Gバイトを超えると、自動的に次のスパンを作成します。2 Gバイトごとにファイルが分割されて作成されます。

注) リカバリー領域の空容量が、ある領域をバックアップするに足りる容量であると思われる場合でも、空容量不足エラーを起こすことがあります。

例) Windows2000 領域のバックアップを行い、空のリカバリー領域内に、2.4 Gバイトのバックアップファイルが生成されました。リカバリー領域の残容量が約2.6 Gバイト(5 G - 2.4 G)のところ、続けて同領域をバックアップしようとしても、バックアップが実行されない可能性があります。

空容量不足の表示は次の通りです。表示の意味は、空領域が足りないが、スパンを有効にして他エリアの容量も共有することにより、バックアップを実行していいかどうかを聞いてきます。



開始直後に、上図のメッセージが現れたら、**”NO”を選択し、直ちにバックアップを中断してください。**
バックアップを可能にするには、リカバリ領域に存在するバックアップデータを他の場所に移動する必要があります。

マトリックスの“E”を選択

『リカバリー領域に保存してある Windows2000 領域バックアップファイルを、Windows2000 領域へ復元』

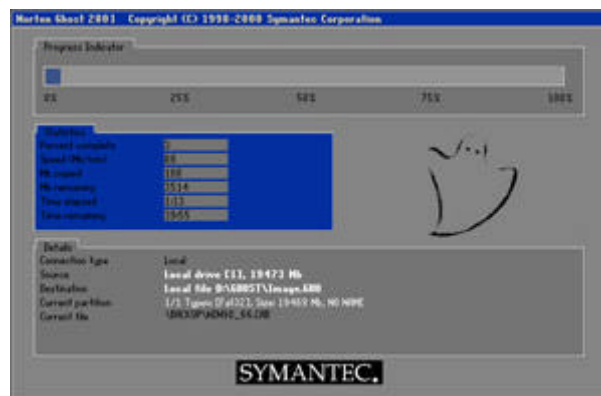
()

Windows2000領域を復元します (領域はすべて上書きされます)

以下の復元用イメージファイルが見つかりました

1. 最新イメージ ("SYSEW" フォルダ内)
2. 旧イメージ ("SYSOLD" フォルダ内)

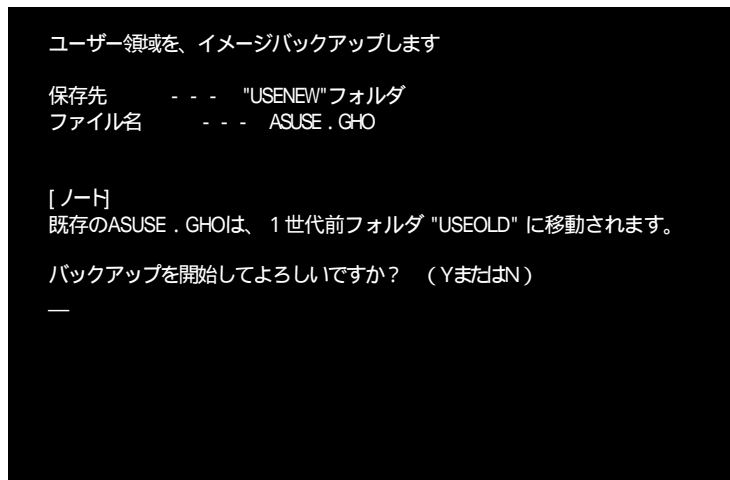
どのファイルを復元しますか? 番号を入力してください(Q;取り消し)



リカバリー領域には、Windows2000 領域バックアップファイルが少なくとも1つ保存することができ、容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを保存できます。第2世代ファイルが存在する時の復元は、どちらかを選択することができます。

マトリックスの“C”を選択

『ユーザー領域を、リカバリー領域内へファイル保存』()



リカバリー領域の容量がゆるせば、ユーザー領域バックアップファイルを、第1世代ないし第2世代まで作成することができます。バックアップが実行されるたびに、既存のユーザー領域バックアップファイルは古い順に消去されていきます。バックアップファイルが2Gバイトを超えると、自動的に次のスパンを作成します。つまり、2Gバイトごとにファイルが分割されて作成されます。

注意 1)

リカバリー領域の空容量が、ある領域をバックアップするに足りる容量であると思われる場合でも、空容量不足エラーを起こすことがあります。(第1章ハードディスクブート版 Windows2000 領域のバックアップ (12 ページ) 参照)

注意 2)

リカバリー開始時に、容量オーバーのメッセージが出た時は直ちに、リカバリーを中止してください。バックアップを再度実行したい場合は、保存されているバックアップファイルを確認後、DOS上で既存バックアップファイルを削除してから行ってください。

マトリックスの“F”を選択

『カバリー領域に保存してあるユーザー領域バックアップファイルを、ユーザー領域へ復元』()

ユーザー領域を復元します (領域はすべて上書きされます)

以下の復元用イメージファイルが見つかりました

1. 最新イメージ ("USENEW" フォルダ内)
2. 旧イメージ ("USEOLD" フォルダ内)

どのファイルを復元しますか? 番号を入力してください(Q;取り消し)



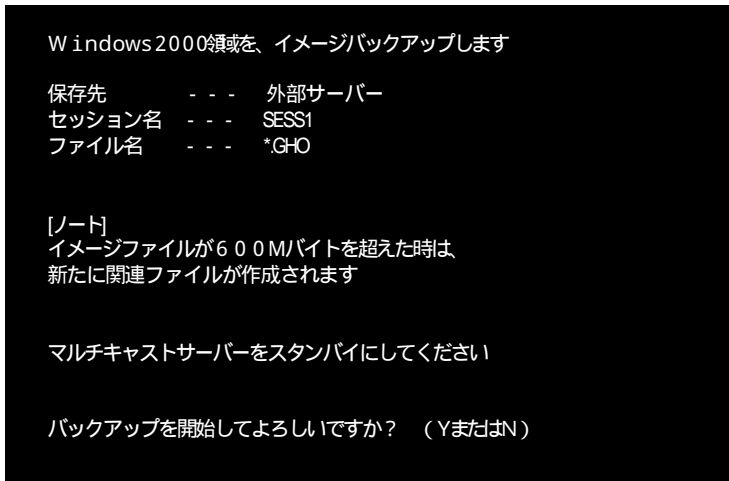
リカバリー領域に、ユーザー領域バックアップファイルが存在する時は、それを復元することができます。第2世代までのユーザー領域バックアップファイルが存在する時は、そのどちらかを選択して復元することができます。

マトリックスの“B”を選択

『Windows2000 領域を、外部サーバーへファイル保存』()

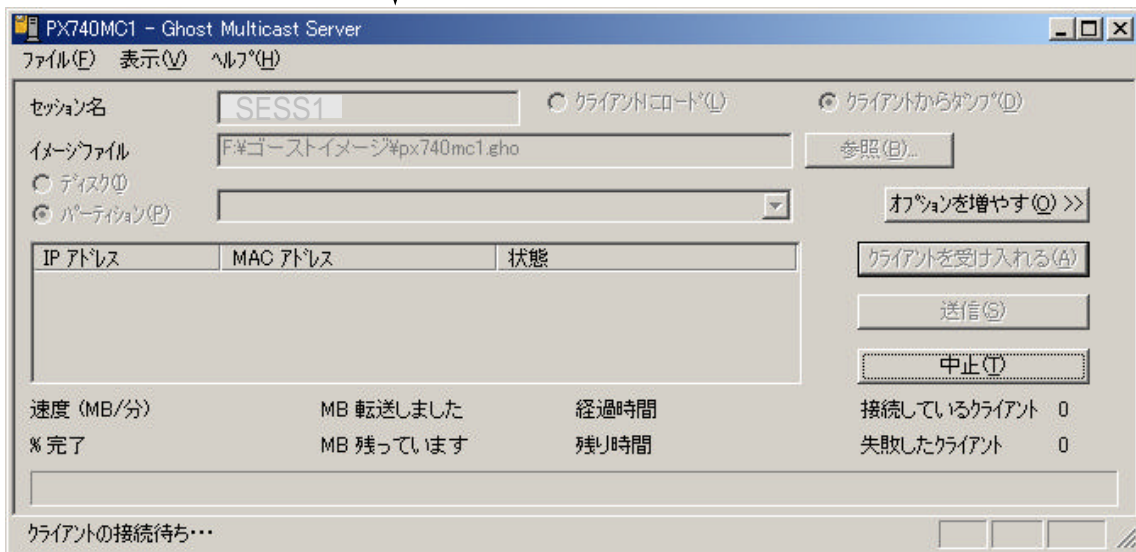
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“ 第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備(4ページ)参照)

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



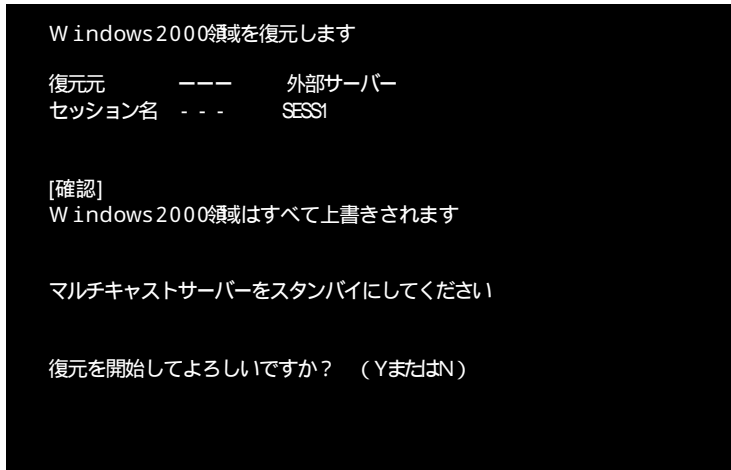
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“G”を選択

外部サーバー内に保存してある Windows2000 領域バックアップファイルを、Windows2000 領域へ復元」()

準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー（外部PC）側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



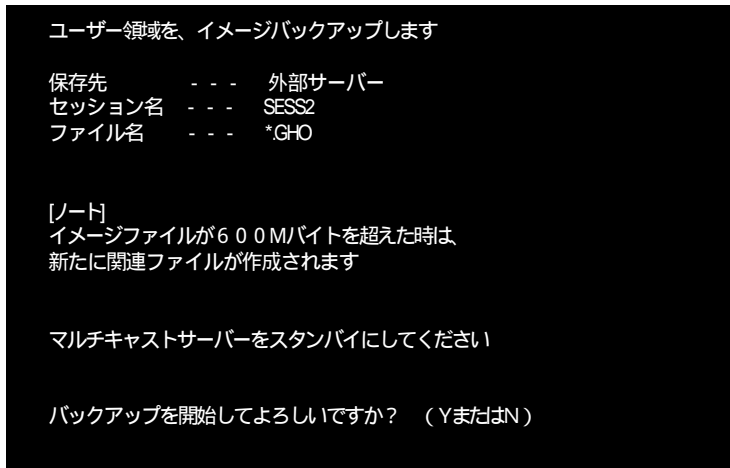
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“D”を選択

『ユーザー領域を、外部サーバー内へファイル保存』()

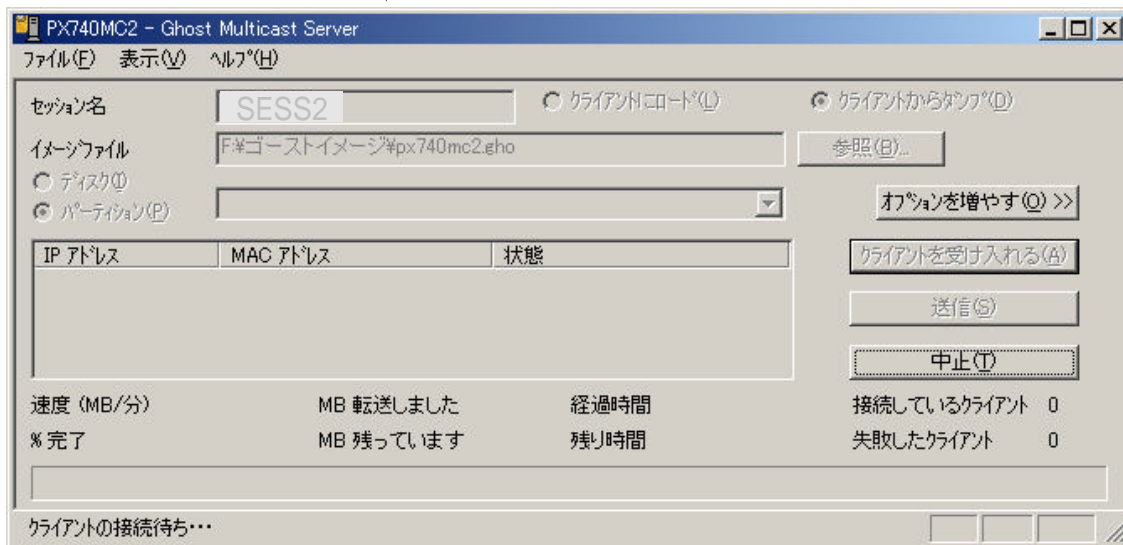
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“ 第1章外部サーバーとリカバリを行うための前準備(4ページ) 参照)

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



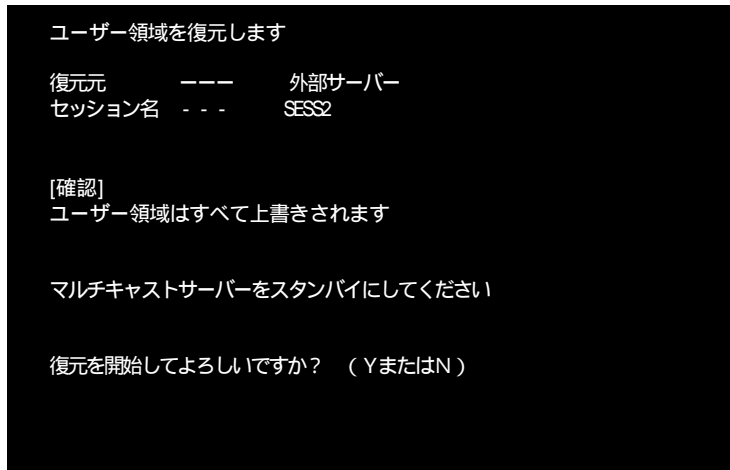
クライアント側リカバリ実行中画面

マトリックスの“H”を選択

外部サーバー内に保存してあるユーザー領域バックアップファイルを、ユーザー領域へ復元』()

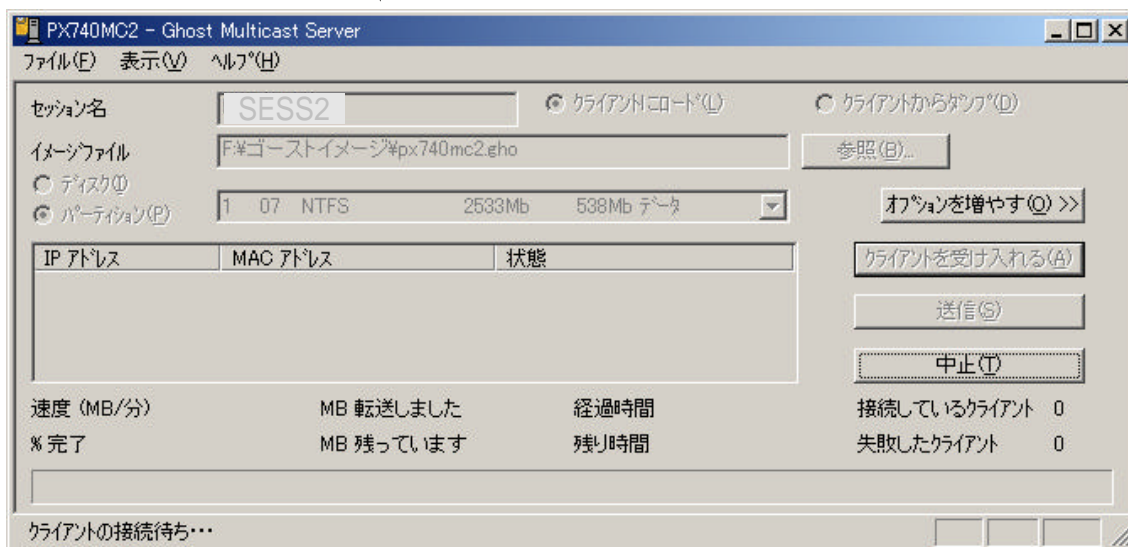
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



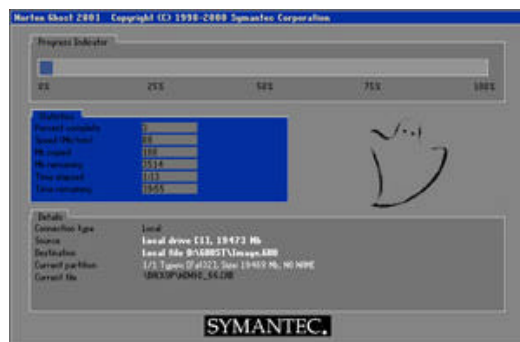
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー (外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



クライアント側リカバリー実行中画面

Bモードリカバリー

[P Cカードブート版]

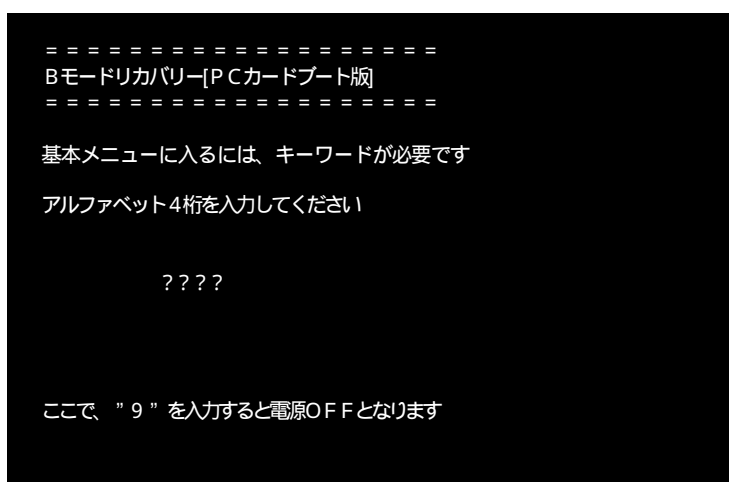
7. Bモードリカバリー[PCカードブート版]

専用のPCカードを本体に挿入し電源投入すると、**Bモードリカバリー[PCカードブート版]**が起動します。**ハードディスク丸ごとリカバリー（バックアップまたは復元）**が可能です。拡張機能では、その他数種類のリカバリーが可能です。

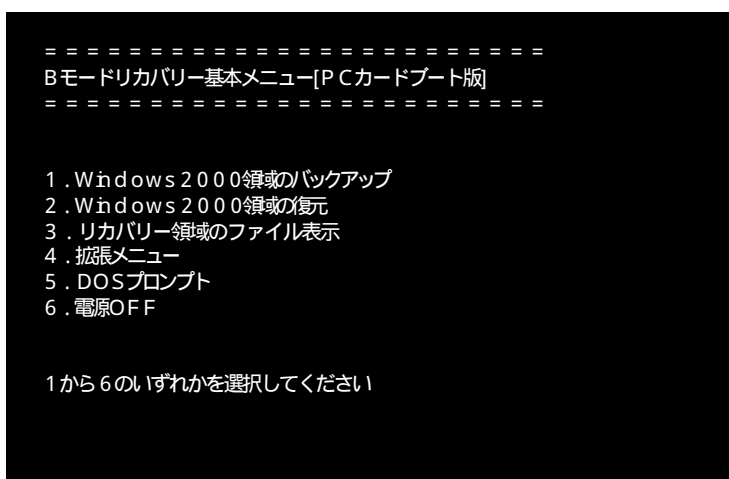
また、専用PCカードの作成方法については、別頁にて説明してあります。（“PCカードブート版リカバリーのPCカード作成”参照）

PCカードブートさせるには予め、本体の**BIOS設定**にて、**PCカードブートを有効**にしておく必要があります。また、**Bモードスイッチは無関係**です。

電源投入後は、**リカバリーメニューがロック**されているので、これを解除する必要があります。特定のアルファベットを入力することにより、ロックが解除され、リカバリーメニューに入ることができます。



↓ キーワードが一致するとメニューに入る



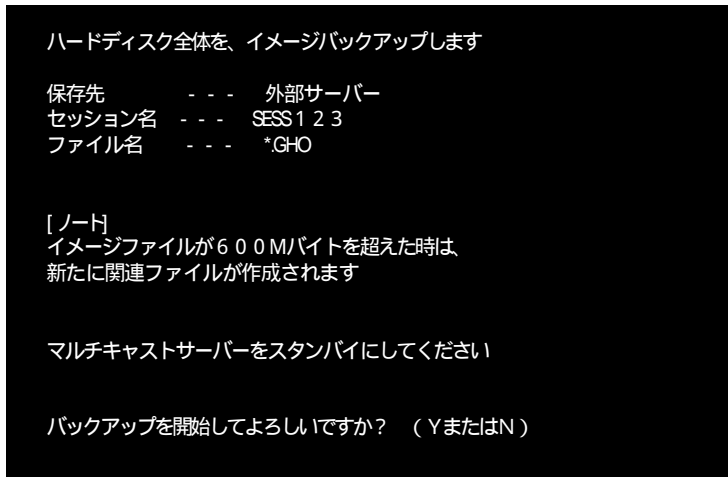
キーワードは、FIVA
キーワードは変更できません

以降、上のメニューの、1. 2. 4. を説明します。

7-1 .メニューの“1”を選択 『ハードディスク全体のバックアップ(サーバーへ)』()

本体ハードディスクの内容を、パーティションを含め丸ごと、外部サーバーへ、圧縮イメージファイルとして保存します。準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”(4ページ)参照)

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>

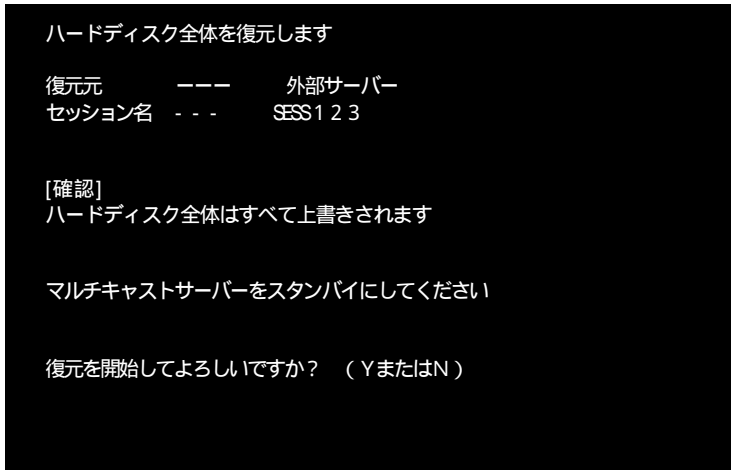


クライアント側リカバリー実行中画面

7-2 .メニューの“2”を選択 『ハードディスク全体の復元(サーバーから)』 ()

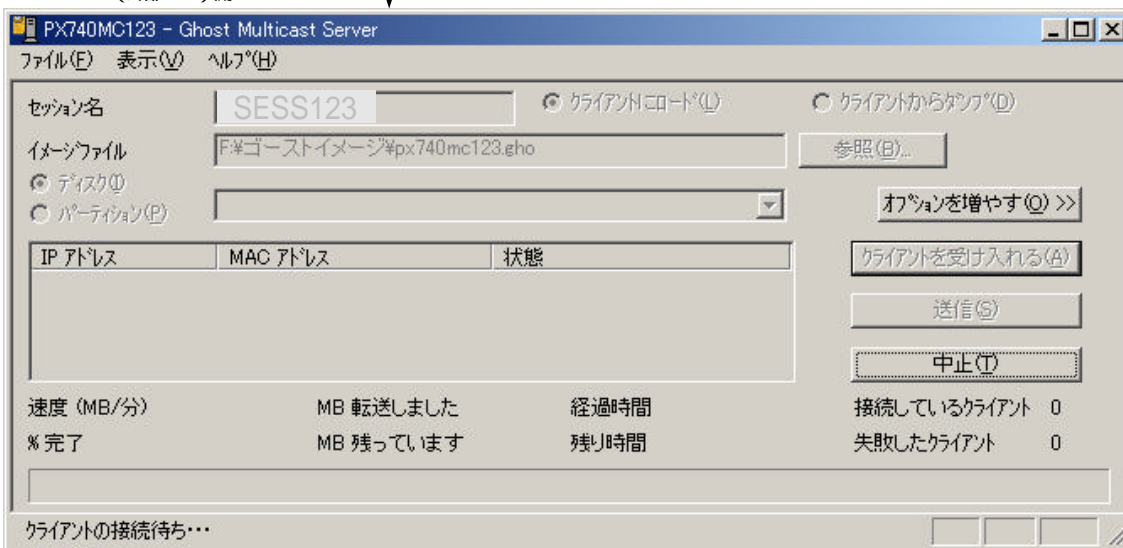
外部サーバー内に保存されているハードディスクバックアップファイルを、本体ハードディスクへ復元します。
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”(4ページ参照))

<クライアント(FIVA)側>



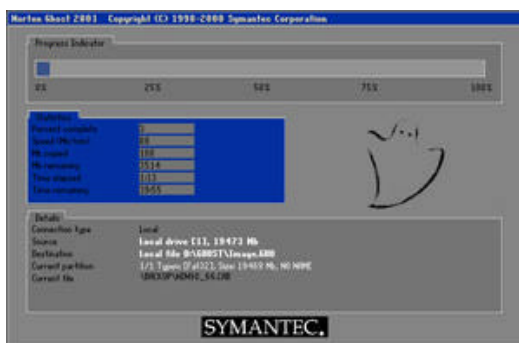
↓
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



↓
クライアント側にて、“Y”を選択

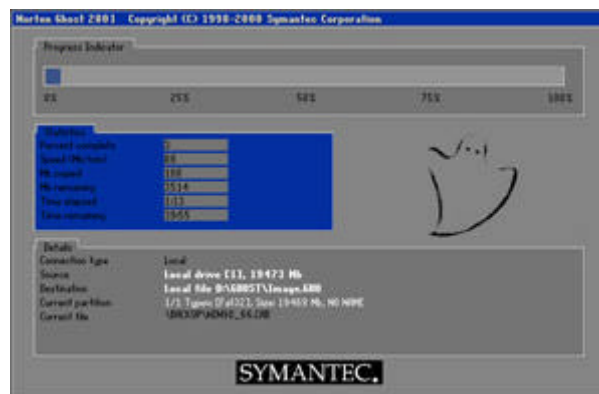
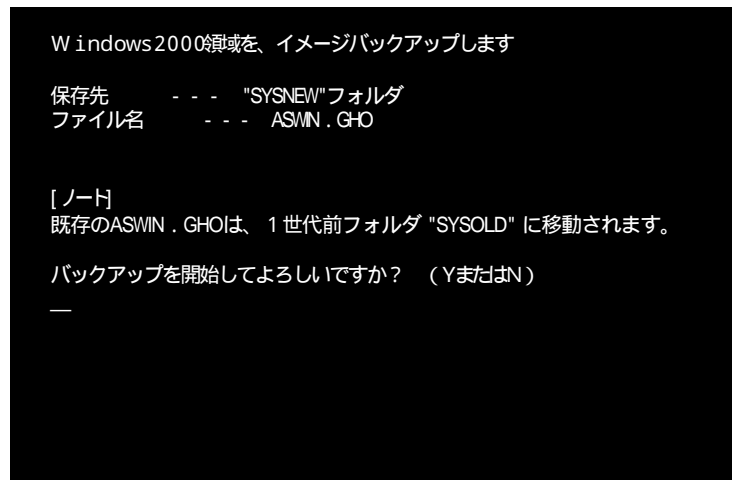
<クライアント(FIVA)側>



クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“A”を選択

『Windows2000 領域を、リカバリー領域内へファイル保存』()



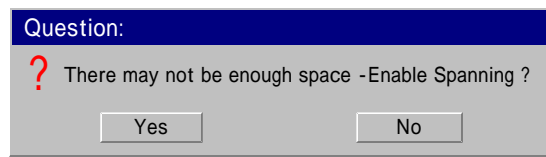
Windows2000 領域バックアップファイルを、少なくとも1つ作成することができます。リカバリー領域の容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを作成できます。バックアップが実行されるたびに、既存の Windows2000 領域バックアップファイルは古い順に消去されていきます。

バックアップファイルが2Gバイトを超えると、自動的に次のスパンを作成します。2Gバイトごとにファイルが分割されて作成されます。

注) リカバリー領域の空容量が、ある領域をバックアップするに足りる容量であると思われる場合でも、空容量不足エラーを起こすことがあります。

例) Windows2000 領域のバックアップを行い、空のリカバリー領域内に、2.4Gバイトのバックアップファイルが生成されました。リカバリー領域の残容量が約2.6Gバイト(5G - 2.4G)のところ、続けて同領域をバックアップしようとしても、バックアップが実行されない可能性があります。

空容量不足の表示は次の通りです。表示の意味は、空領域が足りないが、スパンを有効にして他エリアの容量も共有することにより、バックアップを実行していいかどうかを聞いてきます。



開始直後に、上図のメッセージが現れたら、**”NO”を選択し、直ちにバックアップを中断してください。**
バックアップを可能にするには、リカバリー領域に存在するバックアップデータを他の場所に移動する必要があります。

マトリックスの“E”を選択

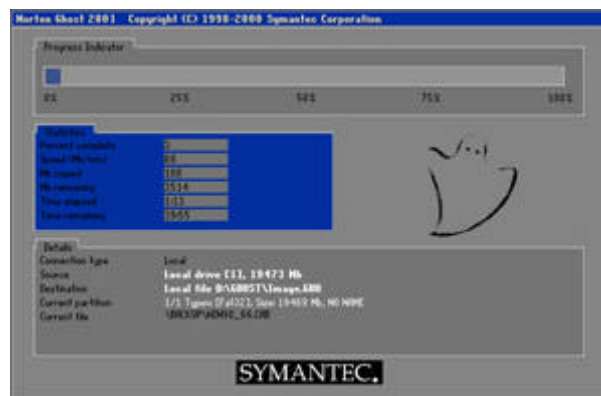
『リカバリー領域に保存してある Windows2000 領域バックアップファイルを、Windows2000 領域へ復元』()

Windows2000領域を復元します (領域はすべて上書きされます)

以下の復元用イメージファイルが見つかりました

1. 最新イメージ ("SYSNEW" フォルダ内)
2. 旧イメージ ("SYSOLD" フォルダ内)

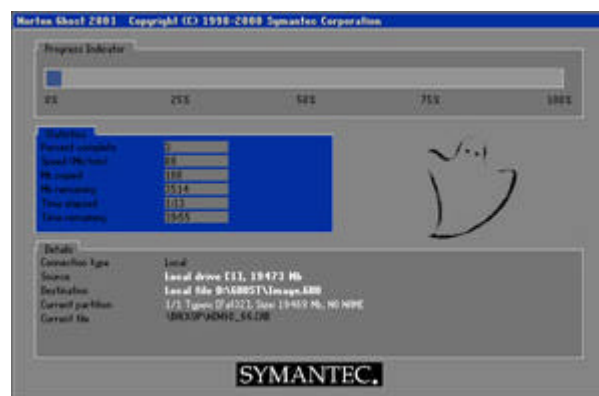
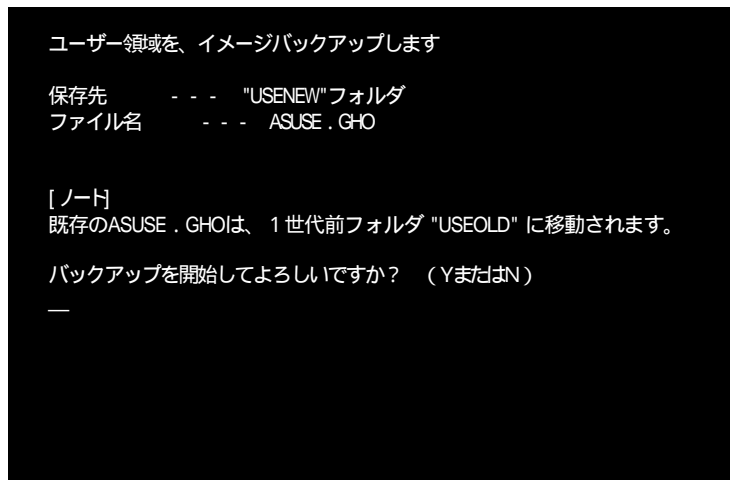
どのファイルを復元しますか? 番号を入力してください(Q;取り消し)



リカバリー領域には、Windows2000 領域バックアップファイルが少なくとも1つ保存することができ、容量がゆるせば、第2世代までの Windows2000 領域バックアップファイルを保存できます。第2世代ファイルが存在する時の復元は、どちらかを選択することができます。

マトリックスの“C”を選択

『ユーザー領域を、リカバリー領域内へファイル保存』()



リカバリー領域の容量がゆるせば、ユーザー領域バックアップファイルを、第1世代ないし第2世代まで作成することができます。バックアップが実行されるたびに、既存のユーザー領域バックアップファイルは古い順に消去されていきます。

バックアップファイルが2 Gバイトを超えると、自動的に次のスパンを作成します。つまり、2 Gバイトごとにファイルが分割されて作成されます。

リカバリー領域の空容量が、ある領域をバックアップするに足りる容量であると思われる場合でも、空容量不足エラーを起こすことがあります。(第1章ハードディスクブート編 Windows2000 領域のバックアップ(12ページ)参照)

注意)

リカバリー開始時に、**容量オーバー**のメッセージが出た時は直ちに、リカバリーを中止してください。バックアップを再度実行したい場合は、保存されているバックアップファイルを確認後、DOS上で既存バックアップファイルを削除してから行ってください。

マトリックスの“F”を選択

『リカバリー領域に保存してあるユーザー領域バックアップファイルを、ユーザー領域へ復元』()

ユーザー領域を復元します (領域はすべて上書きされます)

以下の復元用イメージファイルが見つかりました

1. 最新イメージ ("USENEW" フォルダ内)
2. 旧イメージ ("USEOLD" フォルダ内)

どのファイルを復元しますか? 番号を入力してください(Q;取り消し)



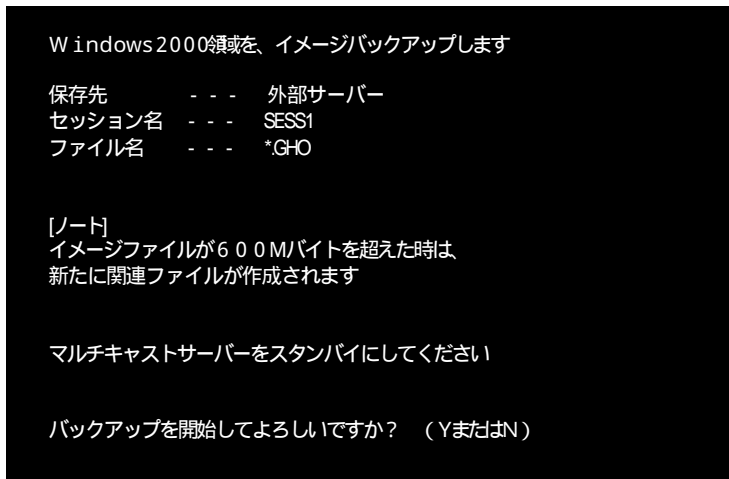
リカバリー領域に、ユーザー領域バックアップファイルが存在する時は、それを復元することができます。第2世代までのユーザー領域バックアップファイルが存在する時は、そのどちらかを選択して復元することができます。

マトリックスの“B”を選択

『Windows2000 領域を、外部サーバーへファイル保存』()

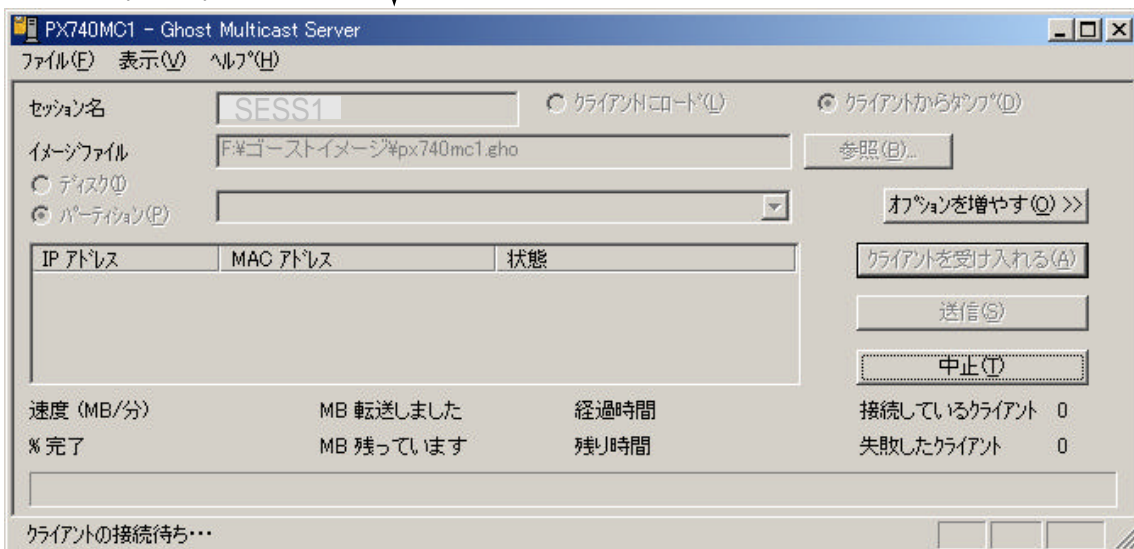
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”(4ページ参照) <クライアント(FIVA)側>

<クライアント(PX740)側>



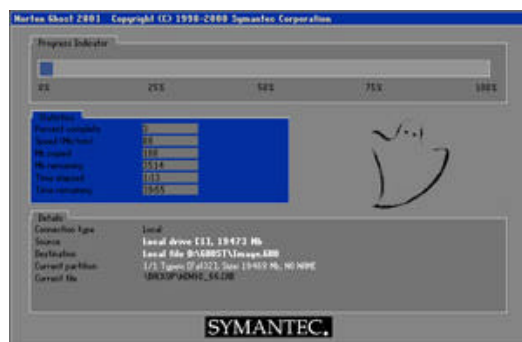
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



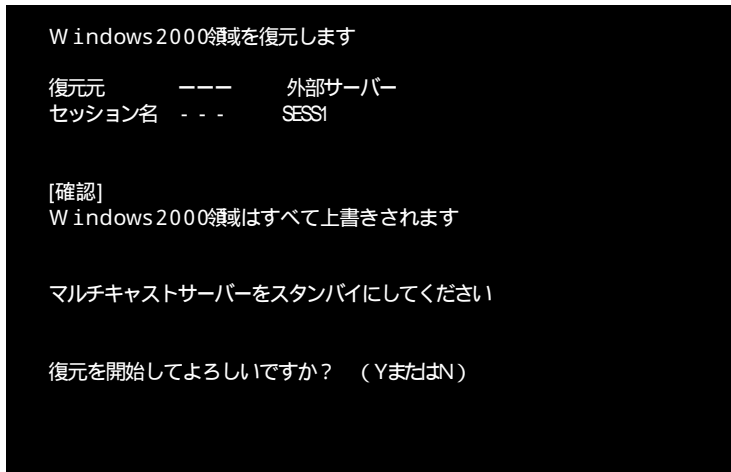
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“G”を選択

外部サーバー内に保存してあるWindows2000領域バックアップファイルを、Windows2000領域へ復元」()

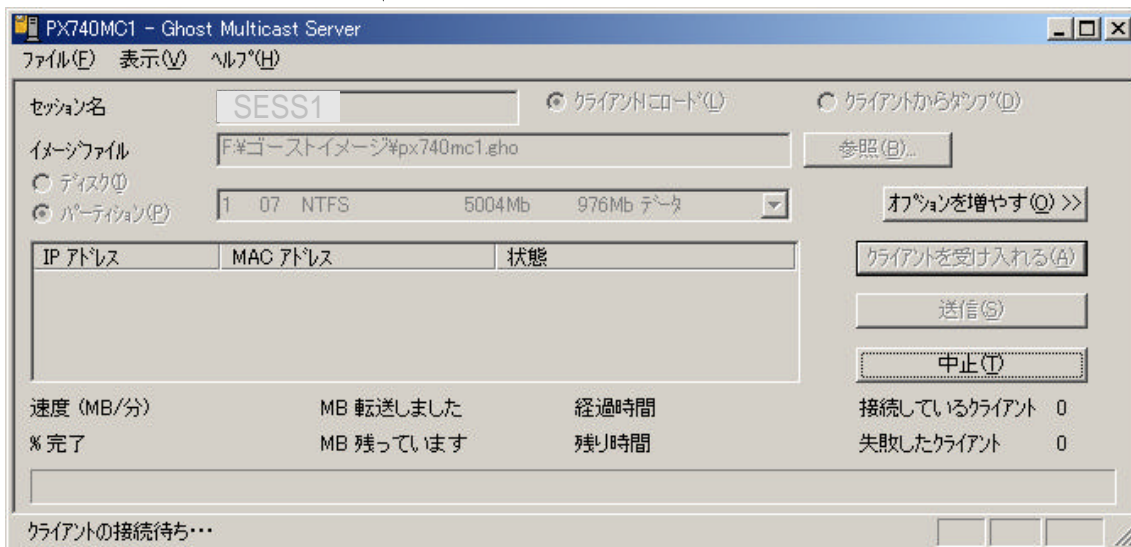
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



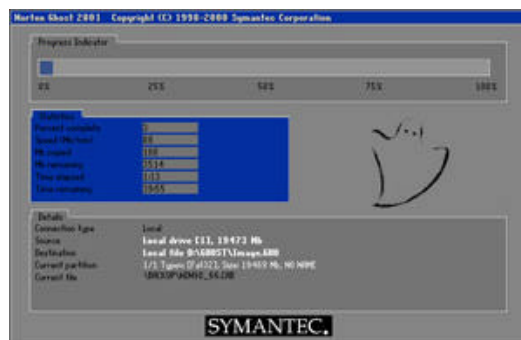
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー（外部PC）側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



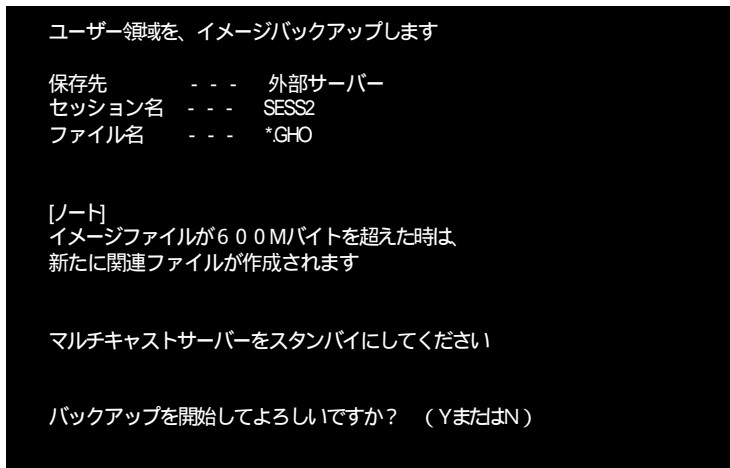
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“D”を選択

『ユーザー領域を、外部サーバー内へファイル保存』()

準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



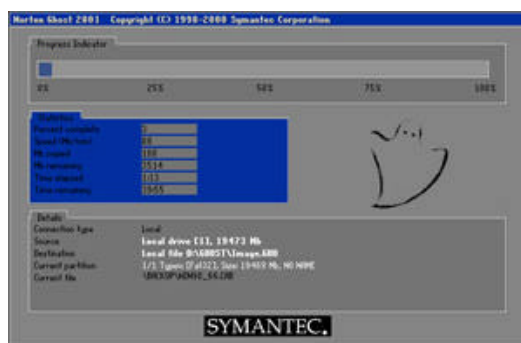
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー (外部PC) 側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



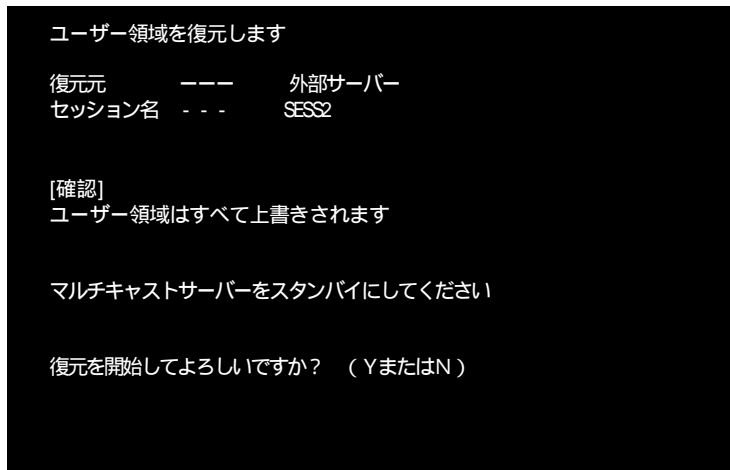
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“H”を選択

外部サーバー内に保存してあるユーザー領域バックアップファイルを、ユーザー領域へ復元()

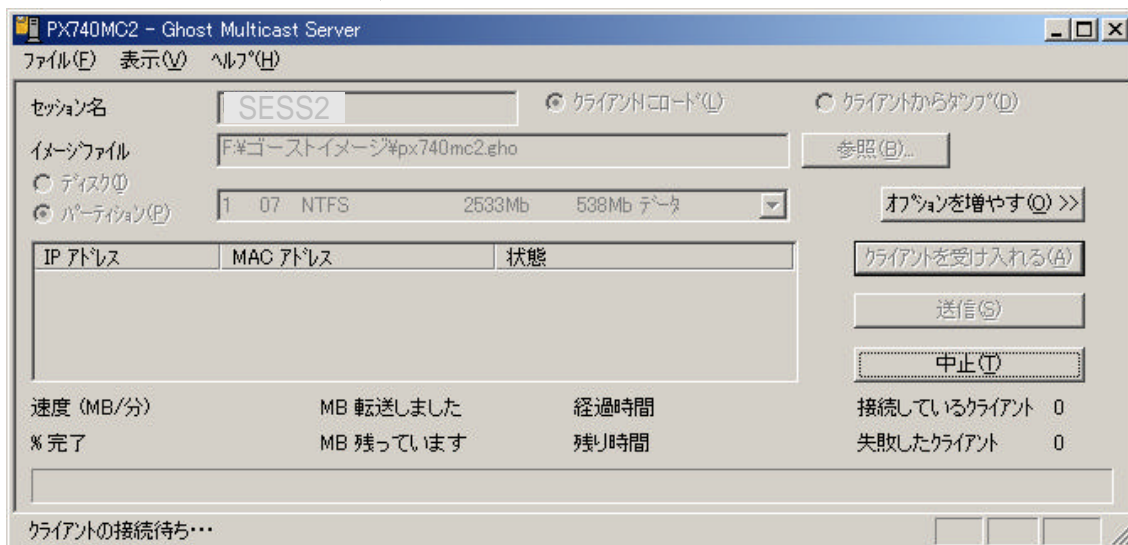
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。(“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”(4ページ)参照)

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー(外部PC)側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



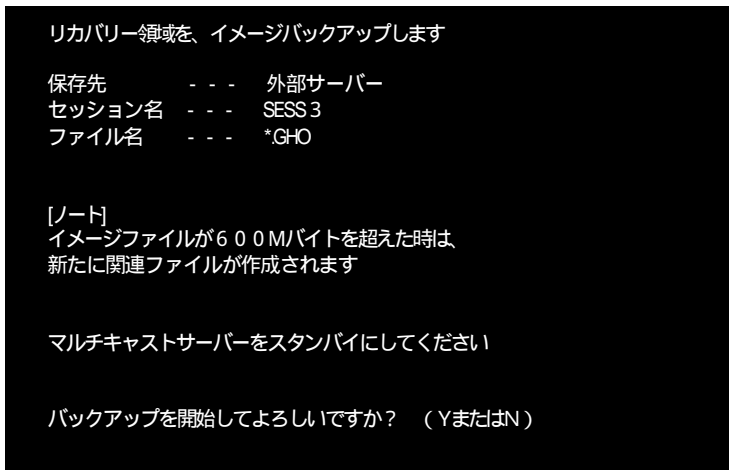
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの「Y」を選択

『リカバリー領域を、外部サーバー内へファイル保存』()

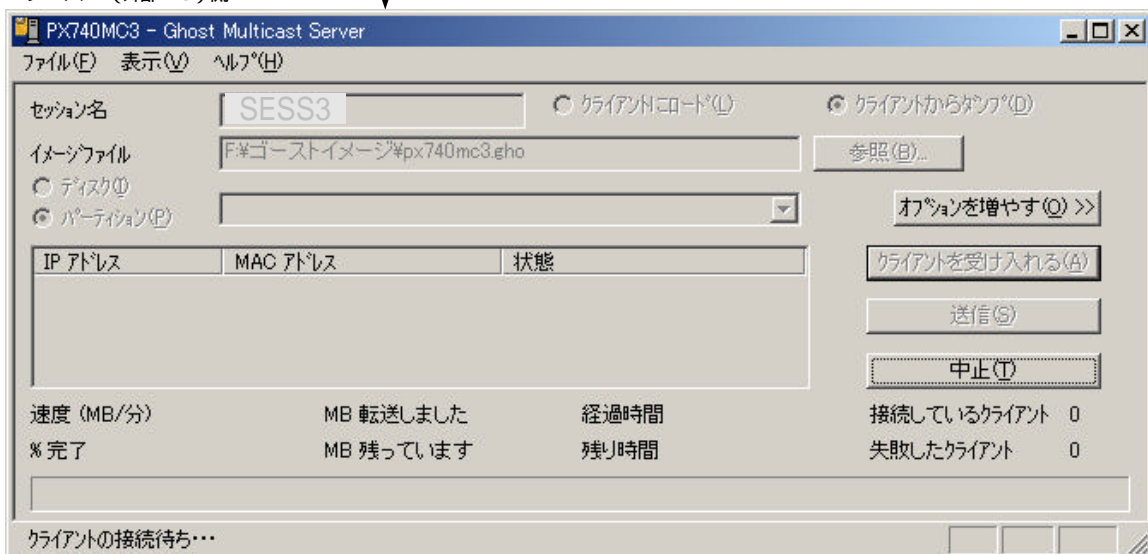
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー（外部PC）側>



クライアント側にて、「Y」を選択

<クライアント(FIVA)側>



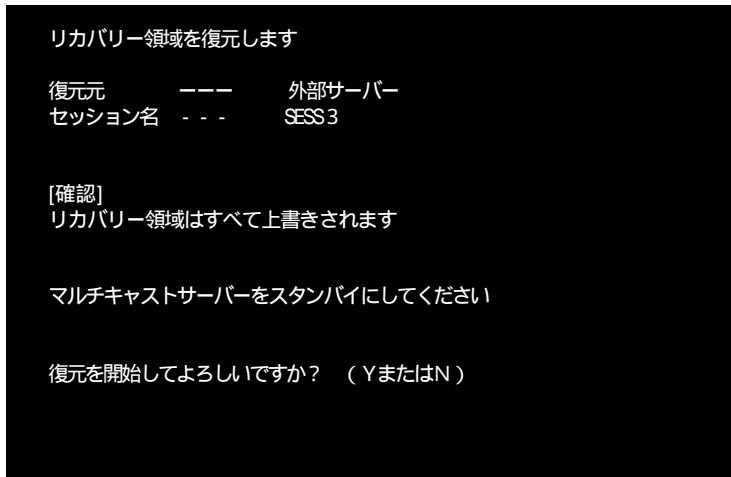
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“J”を選択

外部サーバー内に保存してあるリカバリー領域バックアップファイルを、リカバリー領域へ復元」()

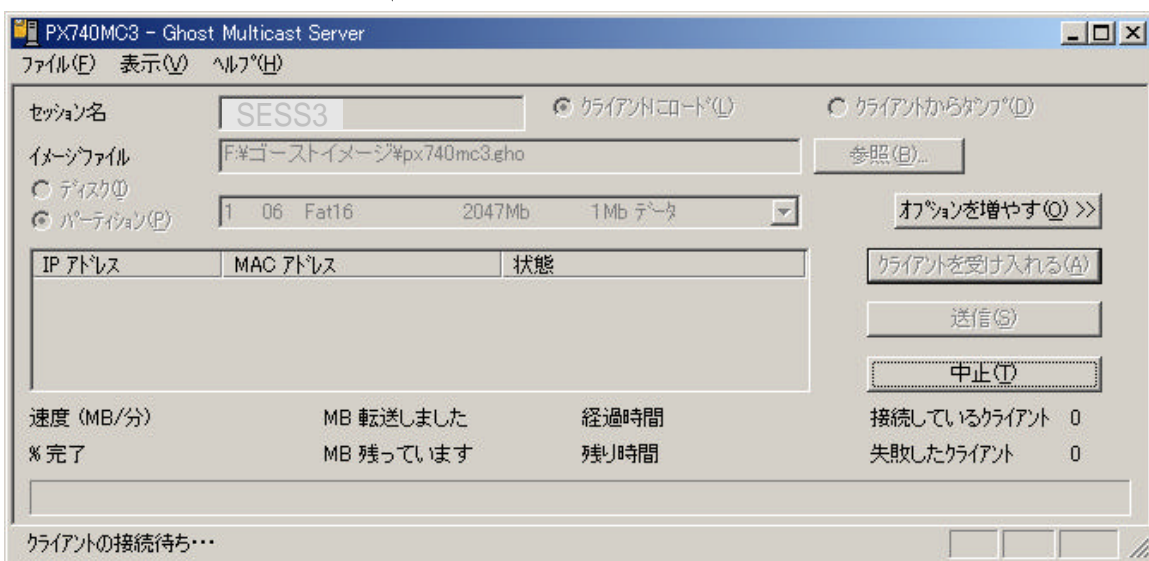
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



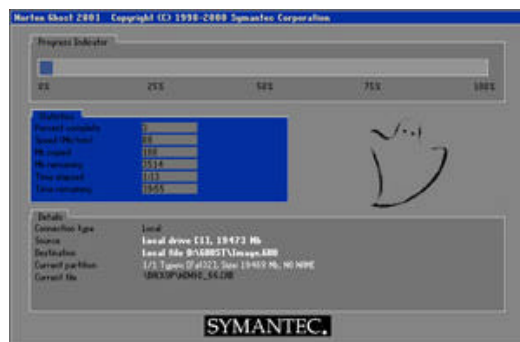
↓ サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー (外部PC) 側>



↓ クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



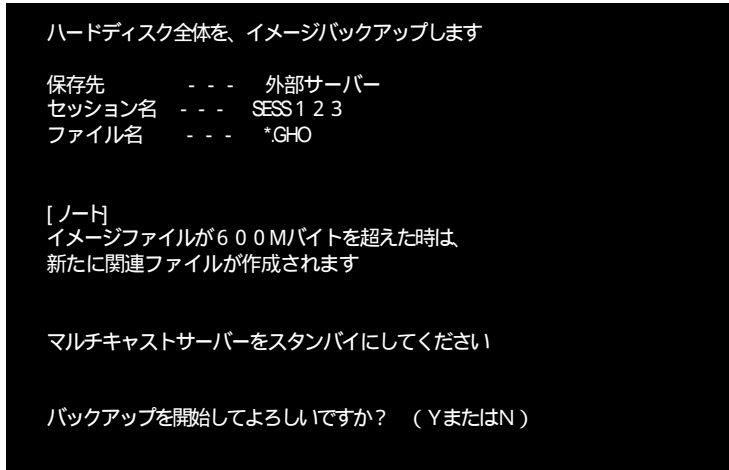
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“K”を選択

ハードディスク丸ごと、外部サーバー内へファイル保存』()

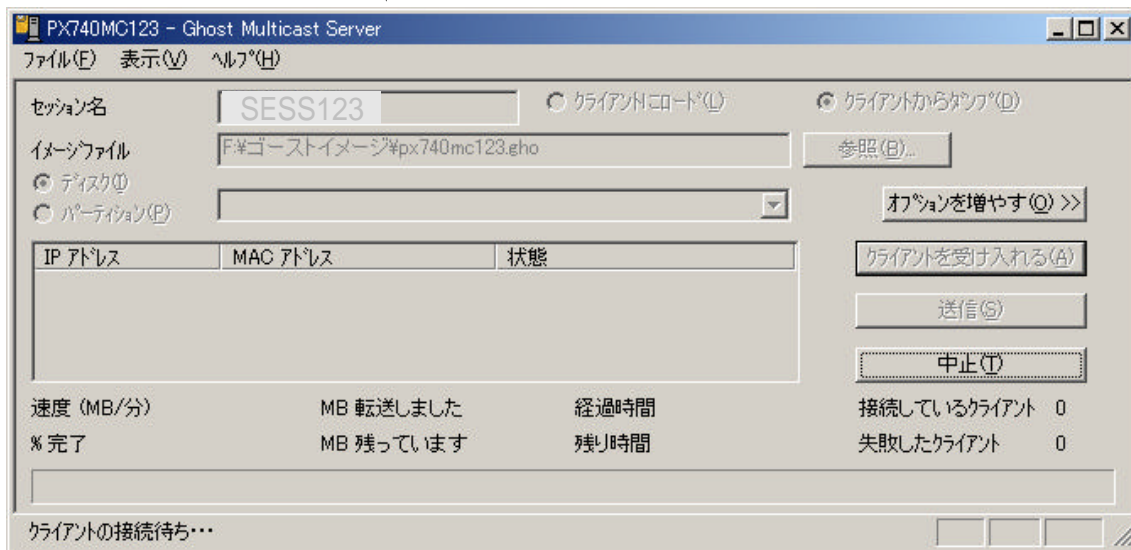
準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



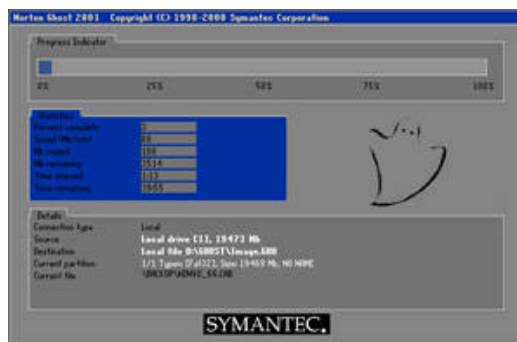
サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー（外部PC）側>



<クライアント(FIVA)側>

クライアント側にて、“Y”を選択



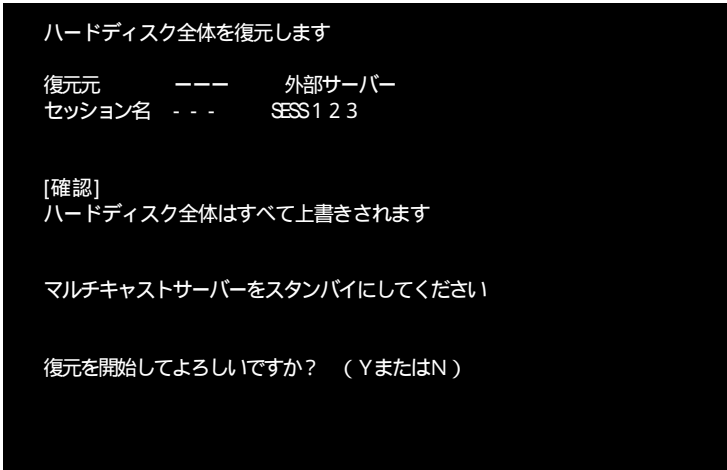
クライアント側リカバリー実行中画面

マトリックスの“L”を選択

外部サーバー内に保存してあるハードディスクバックアップファイルを、ハードディスク全体へ復元()

準備；マルチキャストサーバーの環境が必要です。（“第1章外部サーバーとリカバリーを行うための前準備”（4ページ）参照）

<クライアント(FIVA)側>



サーバー側にて、マルチキャストサーバーをスタンバイにする

<サーバー（外部PC）側>



クライアント側にて、“Y”を選択

<クライアント(FIVA)側>



クライアント側リカバリー実行中画面

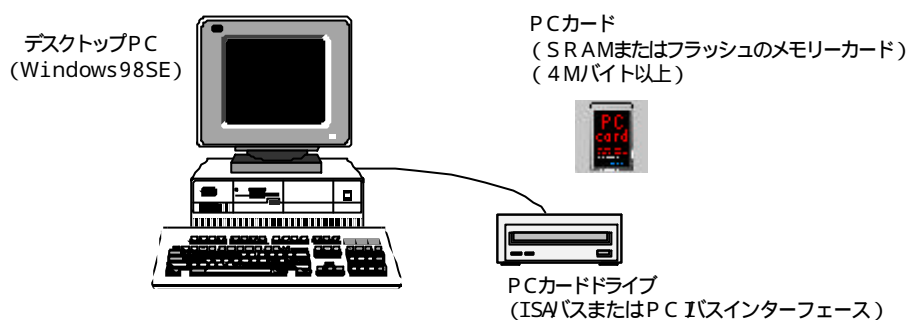
補 足

8 . 補足

8-1 . PCカードブート版リカバリーのPCカード作成

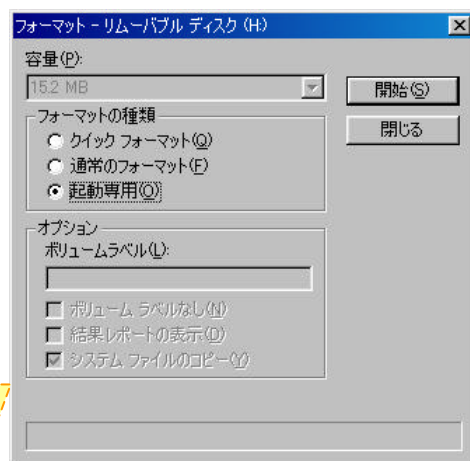
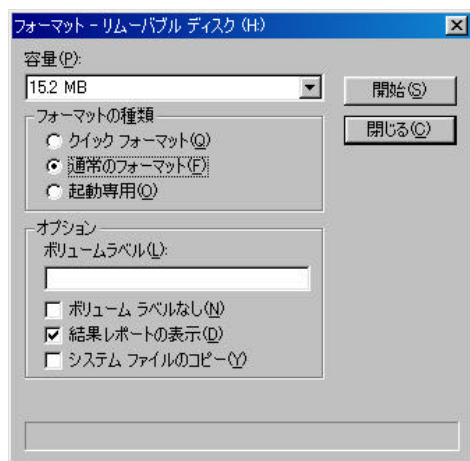
専用PCカードを作成するには、以下の環境を準備します。手順としては、PCカードに、MS-DOSのシステムを転送することにより、PCカードブート可能にし、リカバリー作業に必要なファイルを、PCカードにコピーします。

注意 ; USBまたはIEEE1394インターフェースのPCカードドライブは、システム転送ができないことがあります。ISAまたはPCIインターフェースのものをお使いください。



OS は Windows98 または Windows98SE を推奨いたします。

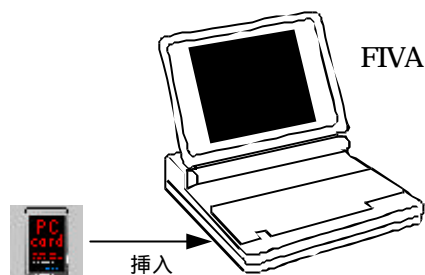
PCカードをフルフォーマットします。
PCカードを入れたドライブを右クリックし、フォーマットを選択します。



次に、Windows98SE 中の、MS-DOS システムの転送を行います。これにより、PCカードがブート可能になります。

次に、ブート可能になった P C カードを本体に挿入し、ソフトスイッチを A モード側にして電源投入します。B I O S 画面へ行き、P C M C I A B O O T を Enabled の設定にします。

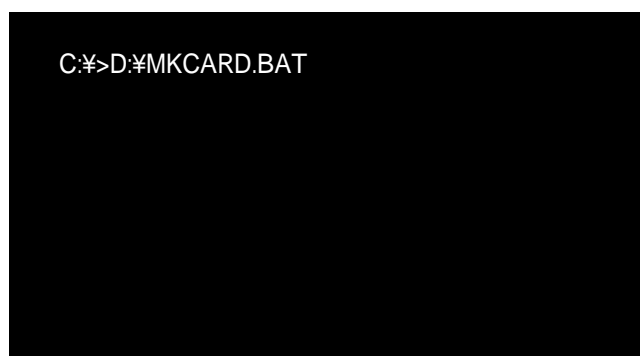
BIOS 画面は、電源投入後 CASIO ロゴが表示中に “ F2 ” キーを押すと BIOS 画面になります。



MS - D O S 画面にて、P C カードドライブレターから、以下のコマンドを実行します。必要なファイルが P C カードに転送されます。

ちなみに、“ D : ” は、P C カードブートした時の、リカバリー領域のドライブレターです。

注意)
 付属のリカバリーCDROM で本体ハードディスクをリカバリーした直後は、ドライブレターの指定に注意が必要です。以下のバッチ実行時には、P C カードから見た、リカバリー領域のドライブレターを指定するようにしてください。



参考) “ M K C A R D . B A T ” のファイルは、工場出荷時にリカバリー領域のファイルとして収められています。

これで、専用 P C カードは完成です。P C カードを挿入したまま、本体を再起動すると、“ B モードリカバリー [P C カードブート版] ” が実行されます。(ただし前もって、B I O S 上で、P C M C I A を有効にしておく必要があります。)

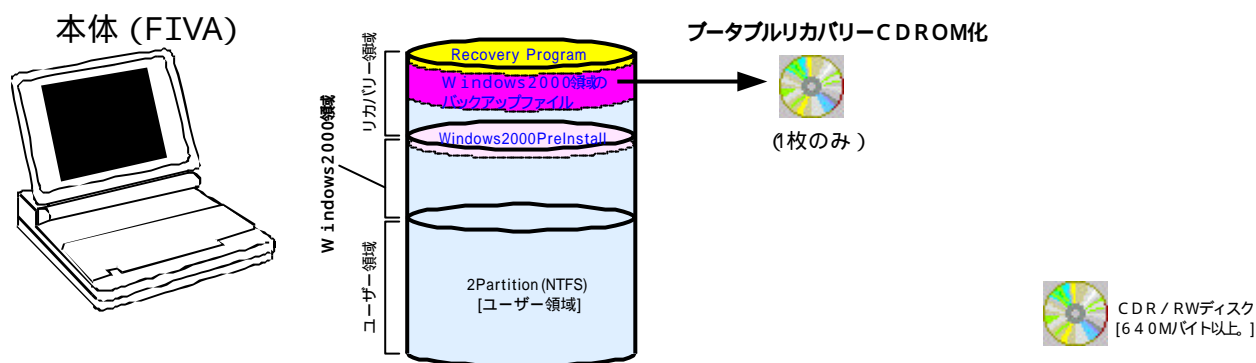
8-2 .ブータブルのリカバリーCDROM 作成方法

バックアップした Windows2000 領域イメージ、または、リカバリー領域イメージ、またはハードディスク全体イメージを、ファイルとして保存するだけでなく、それをブータブルリカバリーCDROM として作成することも可能です。作成された CDROM は、元の領域またはハードディスクを復元することができます。

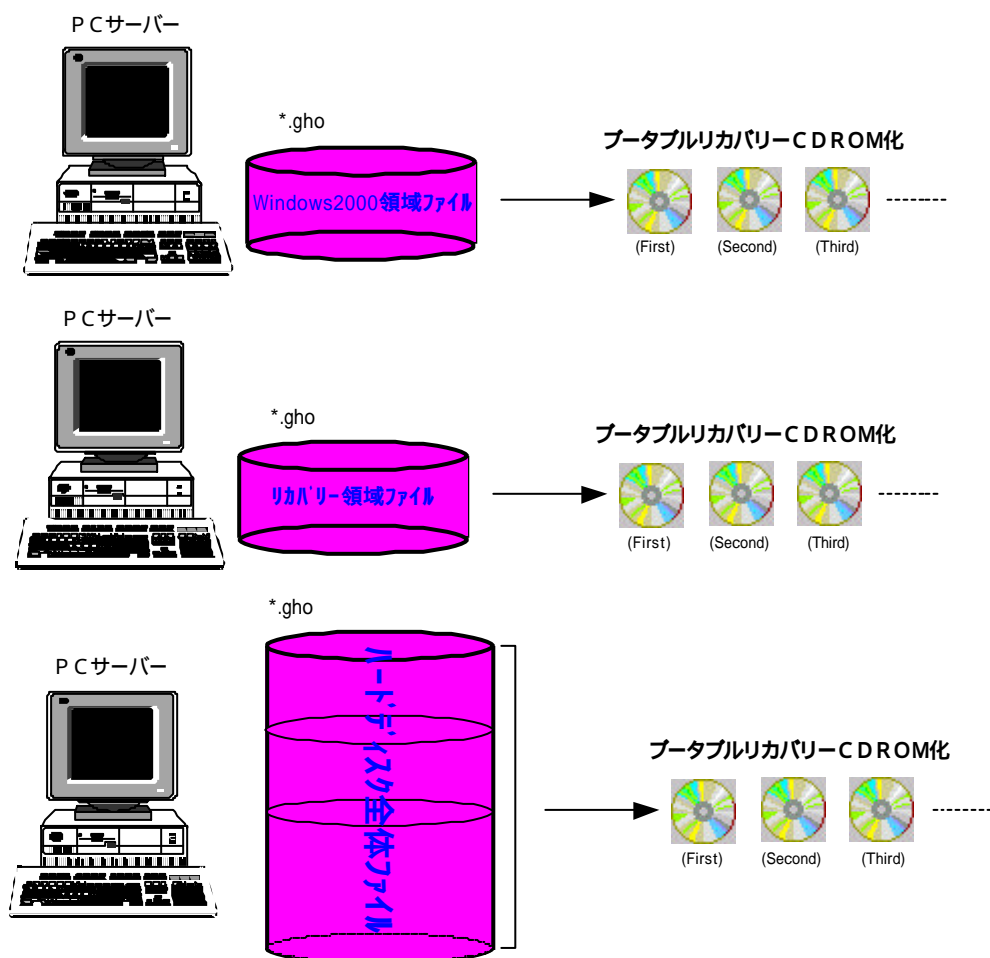
その手法は、

- ・ **本体 (F I V A) ハードディスクのリカバリー領域に保存されている、Windows2000 領域バックアップファイルを、ブータブルリカバリーCDROM 化する方法。**

* バックアップファイルが、[C D R / R Wメディア容量 - (マックス) 1 0 Mバイト]を超えるものは、CDROM 化できません。

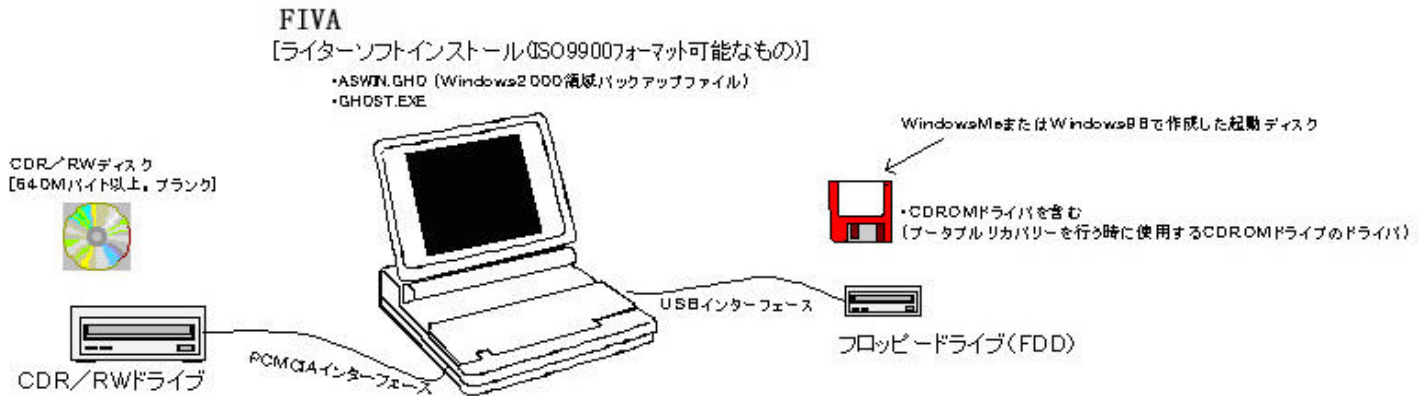


- ・ **P Cサーバーに保存された、本体 (F I V A) の Windows2000 領域、またはリカバリー領域、または、本体ハードディスク全体のバックアップファイルを、ブータブルリカバリーCDROM 化する方法があります。**



本体リカバリー領域内のバックアップファイルをリカバリーCDROM化

本体のリカバリー領域に保存した、**Windows2000領域バックアップファイル**を、**1枚のブータブルリカバリーCDROM**として作成することができます。ただし、**[CDR/RWメディア容量 - (マ付) 10Mバイト]**を超えるものは、CDROM化できません。(600M-10M)バイトを超えと思われるパーティションまたはドライブを、イメージCDROM化したい場合は、マルチキャストサーバー(600M自動分割スパン)を使用してください。本体(FIVA)でこれを作成するには、CDR/RWメディアに焼き込むCDR/RWドライブ(外付け)が必要です。



準備するもの)

- ・ CDR/CDRWライターソフト (WinCDR等。ただし、ISO9660フォーマット可能なもの)
- ・ CDR/RWドライブ (PCM CIAインターフェース。焼き込み用。)
- ・ CDR/RWメディア (640Mバイト以上)
- ・ FDドライブ (USBインターフェース)
- ・ Windows Me または Windows 98 で作成した起動FD
- ・ CDROM ドライブ (ブータブルリカバリーを実行する時)
- ・ 上記 CDROM ドライブのドライブ

< 作成手順 >

1. Windows98SE 環境において、起動FD (第3章 Windows2000 インストール編を参照) を作成します。
2. その起動FDに、**リカバリー時に使用する外付けCDROMドライブのドライバを組み込みます。**
例) リカバリー時、MPC-142 (CDROM ドライブ) を使用するなら、以下のドライバをFDに組み込みます。
 - ・ KMEKATCD.SYS
 - ・ ATAK365.SYS
 これらのファイルは本体同梱のリカバリーCD-ROMの中のDOSDRVの中にあります。
3. 復元処理をバッチ実行するために、起動FDのAUTOEXEC.BATを編集し、以下のようなフレーズを追加してください。

以下はあくまでも例です。パーティションの切り方等によってフレーズは変わります。詳細は Symantec Ghost Ver6.5 の Ghost_Guide.pdf のコマンドラインをご参照ください。

例) Ghost.exe -clone,mode=pload,src=Z:¥PX740P1.gho:1,dst=1:2 -ntchksk -ntd -sure -auto -batch

注意) ドライブレター (Z:) は、CDROM ドライブ組み込みの際のドライブレターと一致させておく必要があります。必要に応じて修正してください。

4. 市販ライターソフトの実行

本体にインストールしたライターソフトを起動します。必要な処理は以下です。

- ・ 焼き込むデータの選択。
- ・ PX740P1.GHO

・ GHOST.EXE

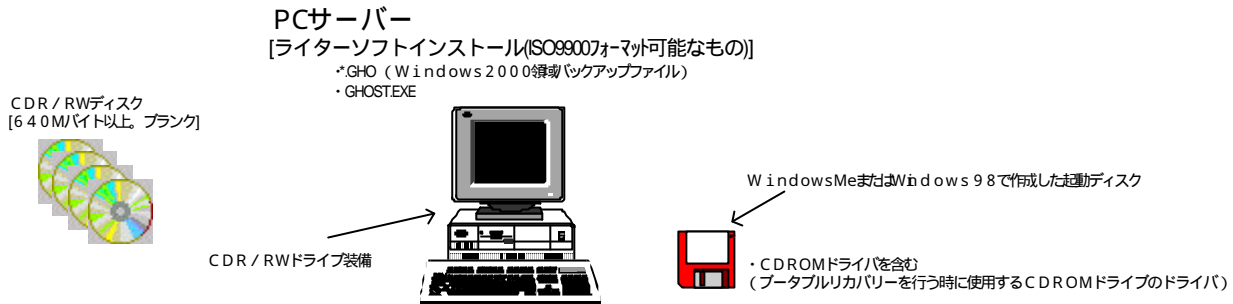
- ・ ブータブルの項目をイネーブルにし、ディスクフォーマット ISO9660 を選択。
- ・ ブータブル CD として作成します。この時、1,2,3 で作成した FD を要求されます。
- ・ 焼き込み実行。

具体的な操作方法は、使用されるライターソフトの操作仕様に委ねます。

サーバー内のバックアップファイルをリカバリーCDROM化

サーバーに保存した以下のバックアップファイルのいずれかを、1枚ないし数枚のブータブルリカバリーCDROMとして作成することができます。焼き込めるファイルは、600Mバイトまたはそれ以下に分割されたスパンイメージファイルです。

- ・ Windows2000 領域バックアップファイル (*.GHO)
- ・ リカバリー領域バックアップファイル (*.GHO)
- ・ ハードディスク全体バックアップファイル (*.GHO)



準備するもの)

- ・ CDR/CDRWライターソフト (WinCDR等。ただし、ISO9660フォーマット可能なもの)
- ・ CDR/RWドライブ (焼き込み用)
- ・ CDR/RWメディア (640Mバイト以上)
- ・ Windows MeまたはWindows 98で作成した起動FD
- ・ CDROMドライブ (ブータブルリカバリーを実行する時)
- ・ 上記CDROMドライブのドライブ

----- < 作成手順 > -----

1. Windows98SE環境において、起動FD (第3章 Windows2000 インストール編を参照) を作成します。
2. その起動FDに、**リカバリー時に使用する外付けCDROMドライブのドライバを組み込みます。**
例) リカバリー時、MPC-142 (CDROMドライブ) を使用するなら、以下のドライバをFDに組み込みます。
 - ・ KMEKATCD.SYS
 - ・ ATAK365.SYS
 これらのファイルは本体同梱のリカバリーCD-ROMの中のDOSDRVの中にあります。
3. 復元処理をバッチ実行するために、起動FDのAUTOEXEC.BATを編集します。以下のフレーズを追加してください。

以下はあくまでも例です。パーティションの切り方等によってフレーズは変わります。詳細は Symantec Ghost Ver6.5 の Ghost_Guide.pdf のコマンドラインをご参照ください。

< 領域リカバリーの時 >

例) Ghost.exe -clone,mode=pload,src=Z:¥PX740P1.gho:1,dst=1:2 -ntchkdsk -ntd -sure -auto -batch

< ハードディスクリカバリーの時 >

例) Ghost.exe -clone,mode=load,src=Z:¥*.gho:1,dst=1 -ntchkdsk -ntd -sure -auto -batch

注意) ドライブレター (Z:) は、CDROMドライブ組み込みの際のドライブレターと一致させておく必要があります。必要に応じて修正してください。

4. 市販ライターソフトの実行

本体にインストールしたライターソフトを起動します。必要な処理は以下です。

- ・ 焼き込むデータの選択。

< 例 > ・ PX740P1.GHO

・ GHOST.EXE

- ・ ブータブルの項目をイネーブルにし、ディスクフォーマット ISO9660 を選択。
- ・ ブータブルCDとして作成します。この時、1,2,3で作成したFDを要求されます。

- ・ 焼き込み実行。
- 2 枚目以降がある場合は、各 600M のデータを、1 枚ずつ焼き込みます
- * 具体的な操作方法は、使用されるライターソフトの操作仕様に委ねます。

作成されたブータブルリカバリーCDROM によるリカバリー作業

出来上がったブータブルリカバリーCDROM によりブートし、元の領域またはハードディスク全体を復元できます。

ただし、領域の復元は、ハードディスクの区画設定が、出荷時の設定と同じになっていることが前提です。例えば、新規のハードディスクやフォーマットしたハードディスクに、領域のブータブルリカバリーはできません。これを領域リカバリーできる状態にするには、製品に添付されているリカバリーディスクによりハードディスク全体をリカバリーすれば、区画も設定されるので、領域のリカバリーは可能です。

ハードディスク全体のバックアップファイルをブータブルリカバリーCDROM 化したものにおいては、区画設定がなされてなくても、リカバリーは可能です。

< 操作方法 >

- 1 . 出来上がった CD-ROM を CD-ROM ドライブにいれ、FIVA の電源を ON します。この時 BIOS 設定で PCMCIA BOOT が Enable になっていることが条件です。
- 2 . あとはリカバリーシステムの指示に従ってください。



1 . はじめに

本章では、CASSIOPEIA FIVA 225 (以下 FIVA と明記) のリカバリ CD-ROM に関して記載しています。

2 . リカバリ CD-ROM の機能概要

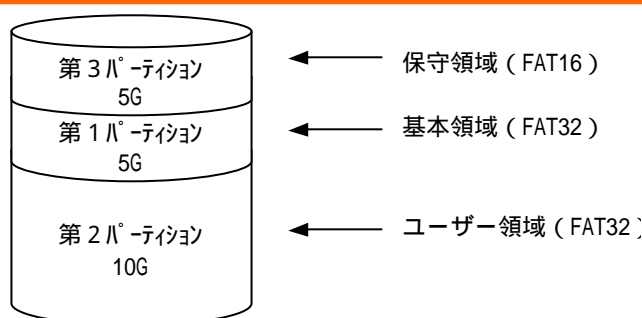
リカバリ CD-ROM には、以下の 2 つの機能 (メニュー) があります。

- (1) ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール
- (2) 保守領域へのリカバリプログラムのインストール

2-1. 「ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール」について

ハードディスクを出荷時と同じパーティション構成にし、全てのパーティションを FAT32 でフォーマットします。ハードディスクのフォーマット後、保守領域にリカバリプログラムのインストールを行います。

- (注意)**
- ・既存のデータはすべて消去されます。
 - ・基本領域とユーザー領域へのインストール処理は一切行われません。



本処理は、以下の場合に応用可能です。

- (1) バックアップが無い状態での Microsoft Windows 2000 のインストール。
- (2) 出荷設定の NTFS フォーマットを FAT32 フォーマットに変更する。
後に Windows2000 のインストールが必要です。

2-2. 「保守領域へのリカバリプログラムのインストール」について

保守領域にリカバリプログラムのインストールを行います。

本処理は、ハードディスクのパーティション構成が出荷時と同じ (フォーマットタイプは考慮しない) 場合のみ実効されます。パーティション構成が出荷時と異なる場合は処理を中断します。

- (注意)**
- ・基本領域とユーザー領域へのインストール処理は一切行われません。

3 . デバイス類の準備

リカバリを実行するに当り、以下のものが必要となります。

- ・ FIVA 本体
- ・ CD-ROM ドライブ (MPC-142CDD) もしくは DVD ドライブ (MPC-245DVD)
以下、「CD-ROM ドライブ」と記してある部分は、「CD-ROM ドライブもしくは DVD ドライブ」となります。また、DVD ドライブを使用する場合は、16bit モードで使用して下さい。
- ・ FIVA Recovery CD-ROM (本体同梱)

4 . リカバリ CD-ROM の操作説明

以下に、リカバリの操作手順と2つの機能について記述します。

4-1 デバイス類のセット

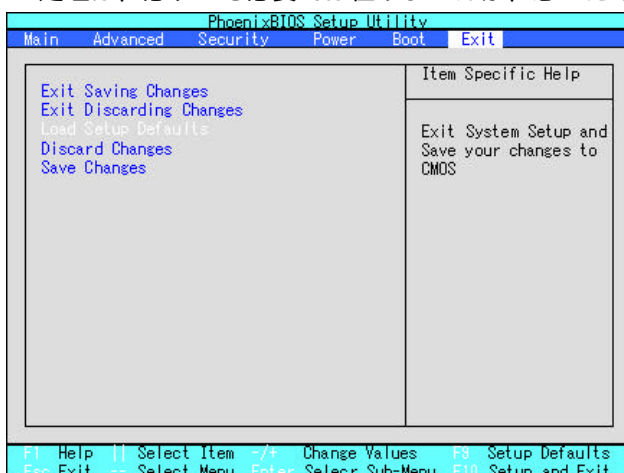
- (1) CD-ROM ドライブにリカバリ CD-ROM をセットし、FIVA に CD-ROM ドライブを装着してください。

4-2 BIOS の設定

リカバリ CD-ROM はブータブルな CD-ROM で、CD-ROM からブートさせる事で自動的にリカバリプログラムが起動する仕組みになっています。CD-ROM から起動させる為に、BIOS の設定を変更する必要があります。

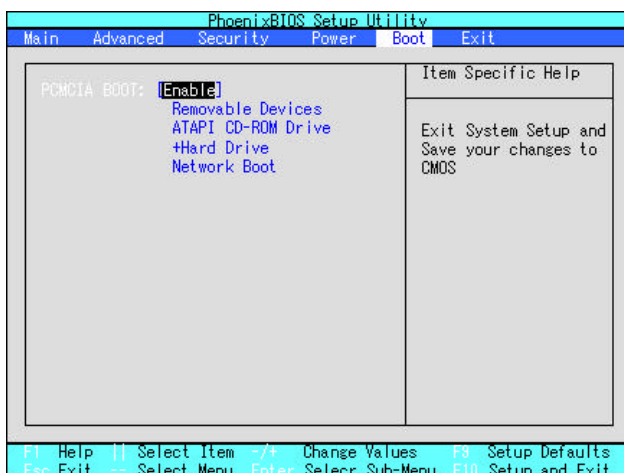
- (1) FIVA の電源を入れます。
- (2) 「CASIO」ロゴが表示されて2~3秒後に[F2]キーを押下し、BIOS 設定画面に移行します。
- (3) BIOS 設定をデフォルトにします。

この処理は、必ずしも必要では在りませんが、念のために実施する事をお奨めします。



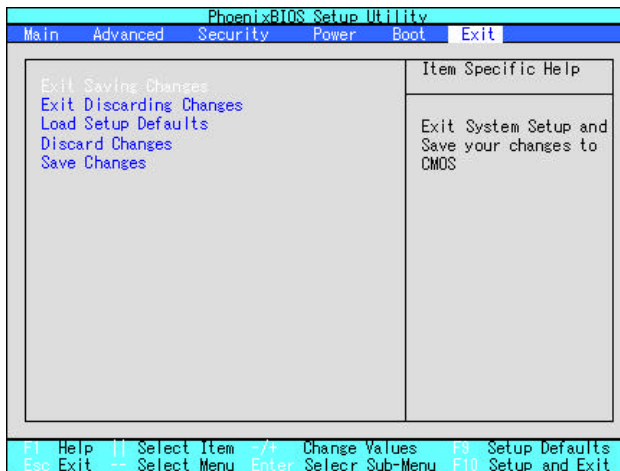
[EXIT]-[Load Setup Default]を選択し、[Enter]キーを押下します。

- (3) PCMCIA-Card ブートを「可」にします。



[Boot]-[PCMCIA BOOT]を'Disable'から'Enable'に変更します。

(4) 設定を保存して終了します。



[Exit]-[Exit Saving Changes]を選択し、[Enter]キーを押下します。

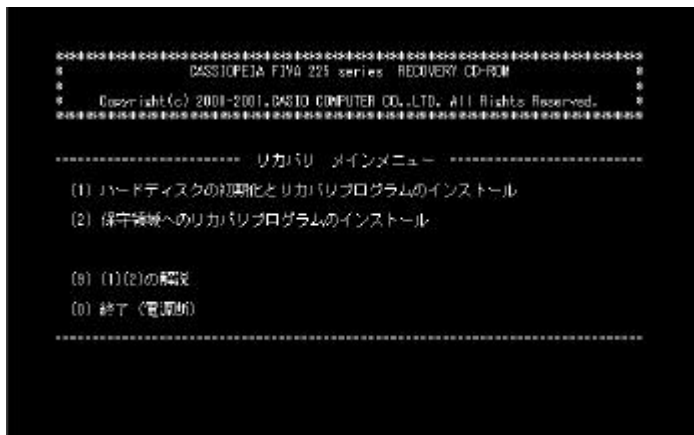
(5) 再起動させます。

(4)を実行すると確認メッセージが表示されますので、[Y]を選択します。

FIVAが再起動し、CD-ROMからブートします。

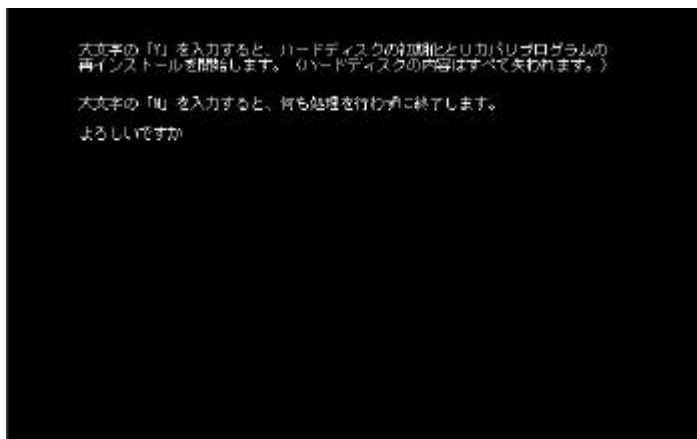
4-3 ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール

(1) リカバリプログラムが起動すると以下の画面が表示されます。



(1)を選択します。(上記画面を「メインメニュー」と呼びます。)

(2) ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストールの実行確認の画面が表示されます。



実行する場合は大文字のY、処理を中止する場合は大文字のNをキー入力します。

処理を中止した場合は「メインメニュー」に戻るか否かの選択画面になります。

(3) 処理実行を選択すると、ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストールを実行中である事を示す以下の画面が表示されます。



(4) 処理が完了すると以下の画面が表示されます。



「メインメニュー」に戻る場合は1、リカバリ処理を終了し電源OFFする場合は0をキー入力します。

以上で、ハードディスクが初期化され、リカバリプログラムが保守領域にインストールされました。FIVA本体に接続されているデバイス類を全て取り外し、OSスイッチをBモードにして電源を入れて、正常にリカバリプログラムが起動する事を確認してください。

- (3) 処理実行を選択すると、リカバリプログラムのインストールを実行中である事を示す以下の画面が表示されます。



<エラー画面>



前述の様に、ハードディスクのパーティション構成が出荷時と異なる（フォーマットタイプは考慮しない）場合はエラーとなり、処理を中断し右記の様なエラー画面を表示します。

この場合は、「ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール」を実行してください。

- (4) 処理が完了すると以下の画面が表示されます。



「メインメニュー」に戻る場合は1、リカバリ処理を終了し電源 OFF する場合は0をキー入力します。

以上で、リカバリプログラムが保守領域にインストールされました。

FIVA 本体に接続されているデバイス類を全て取り外し、OS スイッチを B モードにして電源を入れて、正常にリカバリプログラムが起動する事を確認してください。

5 . Windows2000 をインストールする

リカバリ CD-ROM では、保守領域にリカバリプログラムをインストールしますが、基本領域・ユーザー領域に関しては一切のリカバリ処理を行いません。

よって、基本領域に Windows2000 をインストールする場合は、別途「第3章 Windows2000 インストール編」を参照してください。

第3章

Windows2000 インストール編



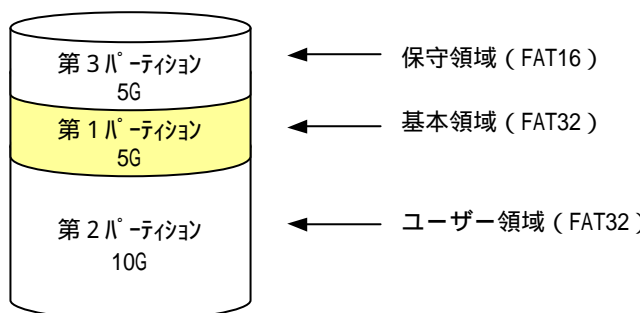
1 .はじめに

本章では、新規のハードディスク（以下 HD と明記）に Microsoft Windows 2000（以下 Win2K と明記）をセットアップする手順について記載しています。

本章で記載されている内容は、(1) バックアップが無い状態での Win2K のインストールや、(2) 出荷設定の NTFS フォーマットを FAT32 フォーマットに変更する（Win2K のインストールが必要です。）場合に実施します。

本章では、以下を前提とした記載をしています。

- (1) スタンドアローンの CASSIOPEIA FIVA 225（以下 FIVA と明記）に対してセットアップを行う。
- (2) Win2K は C ドライブ（基本領域）にセットアップを行う。
- (3) HD のパーティション構成が以下の状態である。（「HD の準備」を参照。）
 - ・パーティション数および各パーティションサイズは出荷時 HD と同じ。
 - ・基本領域とユーザー領域のフォーマットは NTFS ではなく FAT32 である。



2 .セットアップまでの手順

セットアップを開始するまでの手順概略を以下に示します。

1. HD の準備
2. デバイス類の準備
3. 起動 FD の作成
4. セットアップデータの準備
5. セットアップの実行

3 .HDの準備

HD はパーティション構成を出荷時と同じ状態にしておく必要があります。

パーティション構成を出荷時と同じにするには、リカバリ CD-ROM を利用します。

リカバリ CD-ROM の操作方法については、別途「第2章リカバリ CD-ROM 編」の、「1. 「ハードディスクの初期化とリカバリプログラムのインストール」について」を参照してください。

4 .デバイス類の準備

Win2K をセットアップするに当り、以下のものが必要となります。

- ・ FIVA 本体
- ・ CD-ROM ドライブ (MPC-142CDD) もしくは DVD ドライブ (MPC-245DVD)
以下、「CD-ROM ドライブ」と記してある部分は、「CD-ROM ドライブもしくはDVD ドライブ」となります。
また、DVD ドライブを使用する場合は、16bit モードで使用して下さい。
- ・ USB FD ドライブ
- ・ Win2K CD-ROM
- ・ FIVA Recovery CD-ROM
- ・ FD (2HD 1.44MB) 1 枚

5 .起動 FD の作成

Win2K をセットアップする為の DOS ベースの起動 FD を作ります。起動 FD は、Windows98SE がインストールされているコンピュータを利用して作成します。

1. 上記 Windows が起動しているコンピュータの FD ドライブに FD をセットします。

2. FD を「起動専用」でフォーマットします。

(エクスプローラを開き、A ドライブ部を右クリック フォーマットと指定する事で実行できます。)

この時点で、FD には以下の 4 ファイルが存在します。

```
Command.com
DRVSPACE.BIN
IO.SYS
MSDOS.SYS
```

3. config.sys を作成 & 編集します。

スタートメニュー プログラム アクセサリ メモ帳を開き、以下の内容を入力してファイル名 config.sys で FD に保存します。

```
BUFFERS=20
FILES=60
LASTDRIVE=Z

DEVICEHIGH=HIMEM.SYS
DEVICEHIGH=BILING.SYS
DEVICEHIGH=RAMFD.SYS
DEVICEHIGH=ATAK365.SYS /port=190 /mem=CE00
DEVICEHIGH=KMEKATCD.SYS /D:CD001
DEVICEHIGH=DUOATAPE.SYS /V
DEVICEHIGH=DUOATACD.SYS /D:CD001

DEVICEHIGH=JFONT.SYS /MSG=OFF
DEVICEHIGH=JDISP.SYS /HS=LC
DEVICEHIGH=JKEYB.SYS /106 JKEYBRD.SYS
DEVICEHIGH=ANSI.SYS
```

4. config.sys に記載した全ての .sys を FD にコピーします。

これらのファイルは、¥windows /¥windows¥command ディレクトリ、およびリカバリ CD-ROM の DOSdrv ディ

レクタリに存在します。

```
HIMEM.SYS ... <Windows98SE>%windows%
BILING.SYS ... <Windows98SE>%windows%
RAMFD.SYS ... <RecoveryCD-ROM>%DOSDRV%
ATAK365.SYS ... <RecoveryCD-ROM>%DOSDRV%
KMEKATCD.SYS ... <RecoveryCD-ROM>%DOSDRV%
DUOATAPE.SYS ... <RecoveryCD-ROM>%DOSDRV%
DUOATACD.SYS ... <RecoveryCD-ROM>%DOSDRV%
JFONT.SYS ... <Windows98SE>%windows%
JDISP.SYS ... <Windows98SE>%windows%
JKEYB.SYS ... <Windows98SE>%windows%
ANSI.SYS ... <Windows98SE>%windows%command%
```

5. autoexec.bat を作成 & 編集します。

スタートメニュー プログラム アクセサリ メモ帳を開き、以下の内容を入力してファイル名 autoexec.bat で FD に保存します。

```
@echo off

MSCDEX.EXE /D:CD001 /L:Z
set EXPAND=YES
set DIRCMD=/O:N
set LgIDrv=27 * 26 Z 25 Y 24 X 23 W 22 V 21 U 20 T 19 S 18 R 17 Q 16 P 15
set LgIDrv=%LgIDrv% 0 14 N 13 M 12 L 11 K 10 J 9 I 8 H 7 G 6 F 5 E 4 D 3 C

SMARTDRV.EXE
```

6. autoexec.bat に記載した MSCDEX.exe と SMARTDRV.exe を FD にコピーします。

これらのファイルは、%windows / %windows%command ディレクトリに存在します。

```
MSCDEX.EXE ... <Windows98SE>%windows%
SMARTDRV.EXE ... <Windows98SE>%windows%command%
```

7. その他、以下の5つのファイルを FD にコピーします。

```
ANK16.FNT ... <Windows98SE>%windows%
ANK19.FNT ... <Windows98SE>%windows%
KANJI16.FNT ... <Windows98SE>%windows%
XCOPY.EXE ... <Windows98SE>%windows%command%
XCOPY32.MOD ... <Windows98SE>%windows%command%
```

以上で起動FDの作成は終わりです。以下に、起動FDのセットされたファイル一覧を示します。

COMMAND.COM
ANK19.FNT
ANSI.SYS
ATAK365.SYS
autoexec.bat
BILING.SYS
ANK16.FNT
CONFIG.SYS
DRVSPACE.BIN
DUOATACD.SYS
DUOATAPE.SYS
HIMEM.SYS
IO.SYS
JDISP.SYS
JFONT.SYS
JKEYB.SYS
JKEYBRD.SYS
KANJI16.FNT
KMEKATCD.SYS
mscdex.exe
MSDOS.SYS
RAMFD.SYS
SMARTDRV.EXE
XCOPY.EXE
XCOPY32.MOD

合計 25 ファイル

6 .セットアップデータの準備

FIVA に Win2K をセットアップするためのデータを構築します。

1. FIVA に CD-ROM ドライブと FD ドライブを装着します。
2. FD ドライブに前章で作成した起動 FD をセットします。
3. OS スイッチを A モードにします。(OS スイッチは本体右横 - 電源コネクタ近くにあります。)
4. FIVA の電源を入れます。(FD から起動します。)

FD からの起動が完了すると、各ドライブレターは以下のようになります。

FD = A ドライブ
 CD-ROM = Z ドライブ
 基本領域 = C ドライブ
 ユーザー領域 = D ドライブ
 リカバリ領域 = E ドライブ

(注意) 出荷時の HD では、リカバリ領域は隠しドライブとなっていますが、リカバリ処理を行った場合、リカバリ領域は通常の可視ドライブになります。リカバリ領域を隠しドライブとする場合は、Win2K のセットアップ完了後に手動で行う必要があります。(隠しドライブにする方法については、Windows2000 のヘルプを参照してください。)

5. Win2K セットアップデータをコピーします。

CD-ROM ドライブに Win2K CD-ROM をセットします。セットアップデータは必ず D ドライブにコピーします。

- (1) D ドライブに i386 ディレクトリを作成します。

```
A:> mkdir D:i386 [return]
```

- (2) Win2K CD-ROM の i386 ディレクトリ下の全ファイル(サブディレクトリを含め全て)を D ドライブに作成した i386 ディレクトリ下にコピーします。(5526 個のファイルがコピーされます。)

```
A:> xcopy /E Z:¥i386¥*. * D:¥i386¥. [return]
```

6. FIVA 固有の Win2K 用ドライバをコピーします。

CD-ROM ドライブから Win2K CD-ROM を取り出し、リカバリ CD-ROM をセットします。

ドライバはリカバリ CD-ROM の CDdrivers ディレクトリに収められています。ドライバのコピー先は任意の場所で問題ありません。(以下は、D ドライブにコピーする例です。)

- (1) D ドライブに CDdrivers ディレクトリを作成します。

```
A:> mkdir D:CDdrivers [return]
```

- (2) リカバリ CD-ROM の CDdrivers ディレクトリ下の全ファイル(サブディレクトリを含め全て)を(1)で作成したディレクトリ下にコピーします。

```
A:> xcopy /E Z:¥CDdrivers¥*. * D:¥CDdrivers¥. [return]
```

7. CD-ROM ドライブから取りリカバリ CD-ROM を出します。

(注意) この時点で、C ドライブはクリアな状態(ファイルが無い)である必要があります。

7. セットアップの実行

Win2K のセットアップを行います。

セットアップを行うには、D:\¥i386\WINNT.exe を実行します。

```
A:> D: [return]
D:> cd ¥i386 [return]
D:> WINNT [return]
```

セットアップが開始されますので、ここからは画面の指示に従ってセットアップを進めてください。

- (注意 1)** Win2K は必ず C ドライブにセットアップしてください。(セットアップ中に、セットアップ先のドライブを指定する場合があります。) C ドライブにセットアップしないと、A モードでの起動ができなくなります。
- (注意 2)** Win2K クリーンインストール時、指示が無いと、F A T 3 2 でセットアップされます。これはリカバリで、HDD の領域確保を DOS で行っているための制約です。インストール時、N T F S へのフォーマット形式変換を選択して下さい。
- (注意 3)** セットアップ終了後 D ドライブを N T F S へフォーマット形式を変更してください。詳しくは Windows2000 のヘルプを参照してください。

また、Win2K のセットアップに関しては、Microsoft のホームページにも多くの情報が記載されています。参考にして下さい。

<http://www.microsoft.com/japan/windows2000/guide/professional/setupguide/default.asp>

8. ドライバおよびアドオンソフトについて

リカバリ CD-ROM には、FIVA 専用のドライバやアドオンソフトが同梱されています。

これらは、自動でインストールされませんので、Win2K のセットアップ完了後、適時セットアップする必要があります。以下に、これらのセットアップについて記述します。

8-1 ドライバのセットアップ

(1) CD-ROM ドライバ

CD-ROM ドライバは、Windows2000 にて自動的に認識されます。

(2) ビデオドライバ

ビデオドライバは CD\drivers\video ディレクトリにあります。

ドライバをセットアップするには Setup.exe を実行します。

セットアップ完了後、[画面の解像度]-[設定]を開き、800×600/16bit に設定してください。

(3) ポインタドライバ

ポインタドライバは CD\drivers ディレクトリにあります。

Win2K のセットアップ完了後は、マウスドライバは PS/2 に設定されています。

[コントロールパネル]-[システム]-[デバイスマネージャ]-[マウス]を右クリックし、[プロパティ]-[ドライバ]タブ-[ドライバの更新]を実行して、ドライバを「PS/2」から「ポインタ」に変更してください。

(4) IDE ドライバ

IDE ドライバは CDDrivers\IDE ディレクトリにあります。
 ドライバをセットアップするには Setup.exe を実行します。
 セットアップ完了後の操作は一切ありません。

(注意) IDE ドライバのセットアップは、[コントロールパネル]-[システム]-[デバイスマネージャ]を開き、[IDE ATA/ATAPI コントローラ]に“！”マークが表示されている場合のみ実行する様にしてください。

(5) オーディオドライバとモデムドライバ

オーディオドライバは、¥CDrivers(AliOEM7.INF)ディレクトリにあります。
 [コントロールパネル]-[システム]-[デバイスマネージャ]-[その他のデバイス]-[マルチメディア オーディオ コントローラ]を選択して、[ドライバの更新]を実行します。

(注意1) 途中モデムドライバのインストールを促されます。下記のメッセージが表示された場合は、モデムドライバの場所をご指定ください。

<メッセージ:Lucent Technologies Soft Modem WinNT Drivers Disk 1上のファイル'LTSM.sys'が必要です。>

(注意2) [デバイスドライバのアップデートウィザード]画面が表示されたら、メッセージに従って、途中、[サウンド、ビデオおよびゲームコントローラ]を選択し、[ディスク使用]ボタンにて、ドライバの場所を指定します。また、[デジタル署名が見つかりませんでした "ALi Audio Accelerator WDM driver"]画面が表示された場合は、[はい]を選択してください。

(6) LANドライバ

LANドライバは、¥CDrivers(netrts5.INF)ディレクトリにあります。
 [コントロールパネル]-[システム]-[デバイスマネージャ]-[ネットワークアダプタ]の"Realtek RTL8139(A) PCI Fast Ethernet Adpтер"で[ドライバの更新]をおこなってください。

(注意) 途中"Realtek RTL8139(A/B/C/8130) PCI NIC"をFast Ethernet選択します。

(7) その他のドライバ

その他リカバリCD-ROMには、プリンタドライバ・CD-ROMドライバ・DVDドライバなどが収録されています。
 ドライバの種類とファイル名は、リカバリCD-ROMのreadme.txtファイルに全て記載されています。

なお、セットアップに、ドライバ設定ファイル(INFファイル)を使用する場合は、セットアップ途中で、リカバリCDの「CDRIVERS」フォルダ、あるいは、そのCOPY先を指定する必要があります。

8-2 アドオンソフトのセットアップ

(1) MobileCockpit

MobileCockpit は AdonSoft¥MC2¥Disk1 ディレクトリにあります。
MobileCockpit をセットアップするには Setup.exe を実行します。

(2) Acrobat Reader5.0

Acrobat Reader5.0 は AdonSoft¥Acroread ディレクトリにあります。
Acrobat Reader5.0 をセットアップするには ar500jpn.exe を実行します。

(3) FIVA 専用壁紙

FIVA 専用壁紙は AdonSoft¥Wallpp ディレクトリにあります。
FIVA 専用壁紙をセットアップするには Setup.exe を実行します。

(4) HD識別ファイル

HD識別ファイルは AdonSoft¥CASIOVER ディレクトリにあります。
HD識別ファイルをセットアップするには Setup.exe を実行します。

(制約) Setup.exe を実行すると、HD識別ファイルは、セットアップされますが、セットアッププログラムが終了しません()。「完了」ボタンを押した後は、キャンセルボタンで、セットアッププログラムを終了してください。

完了ボタンを押しても、繰り返し「上書き確認」のメッセージが表示されます。

(注意) HD 識別ファイルは、トラブルが発生して問い合わせを行う場合に必要となる事があります。
リカバリ後は、HD 識別ファイルのセットアップを必ず行う様にしてください。

アドオンソフトの種類とファイル名は、リカバリ CD-ROM の readme.txt ファイルに全て記載されています。

FIVA リカバリーマニュアル

(品番MPC-225BS/225BL)

初版 2001年10月

カシオ計算機株式会社

本社 東京都渋谷区本町1-6-2

CASIO

カシオ計算機株式会社

東京都渋谷区本町1-6-2

TEL :03-5334-4638

FAX :03-5334-4408